

— 茨城県土浦市 —

諏訪窪遺跡

—— 保育園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2007

社会福祉法人 幸樹会
土浦市教育委員会
諏訪窪遺跡調査会

— 茨城県土浦市 —

すわくぼ 諏訪窪遺跡

—— 保育園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2007

社会福祉法人 幸樹会
土浦市教育委員会
諏訪窪遺跡調査会



第2号住居跡カマド遺物出土状況



第1号火葬施設跡



第1号火葬施設跡遺物出土状況

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところであり、貝塚、古墳、集落跡等数多くの遺跡が存在しております。

遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなるだけでなく、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の偉業の一つでもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な責務であり、郷土土浦発展のためにも重要なことと思います。

このたびの諫訪窪遺跡の発掘調査は、市内上高津地区での社会福祉法人 幸樹会による保育園建設事業に伴い実施されたものです。

今回の調査結果、遺跡内では奈良時代から平安時代の堅穴住居跡が発見され、集落跡が形成されていたことが分かりました。そして、遺跡内では中世になると火葬施設跡が設けられ、そこから火葬骨片とともに銅鏡も出土し、県内では数少ない出土例といえます。

本調査によって、市内上高津地区の古代文化の発明にいささかなりとも役立つことができますならば幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行にあたり、関係各位の皆様のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成19年4月

土浦市教育委員会
教育長 富永 善文

例　言

1. 本書は、2006（平成18）年度に実施した土浦市上高津1798-2番地外所在の諏訪窟遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は事業者である社会福祉法人 幸樹会が計画する、保育園建設事業に伴う事前調査として実施したものである。
3. 諏訪窟遺跡の確認調査は2005（平成17）年3月12日に比毛君男（当時上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当した。発掘調査は2006（平成18）年6月13日から7月4日まで実施した。出土品の整理及び報告書の作成は2006（平成18）年7月11日より2007（平成19）年4月28日まで行なった。
4. 諏訪窟遺跡の発掘調査は関口 満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当し、福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）が補佐した。出土品の整理作業及び報告書の作成についても同様である。
5. 本書の原稿執筆は福田・関口が行った。それぞれの担当については、各原稿の末に担当者名を明記した。本書の編集は福田・関口で行い、各原稿の補訂は関口が行なった。
6. 発掘調査、出土品整理作業及び報告書の作成については、次の諸氏、諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい（敬称略）
茨城県教育委員会 茨城県県南教育事務所 土浦市保健福祉部こども福祉課 社会福祉法人幸樹会 株式会社増山建築設計事務所 石川一幸 越田真太郎
7. 本書の写真は現場写真を関口・福田が担当し、遺物写真は関口が担当した。
8. 本書に關わる記録図面・写真・出土品などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。なお、記録や遺物の整理・保管に際して、K Sの略称を付している。

諏訪窟遺跡調査会組織

会長	須田直之	（土浦市文化財保護審議会長）〔平成18年度〕
	雨谷 昭	（土浦市文化財保護審議会長）〔平成19年度〕
副会長	長南幸雄	（土浦市教育委員会教育次長）〔平成18年度〕
	久保庭照雄	（土浦市教育委員会教育次長）〔平成19年度〕
理事	古谷満寿	（土浦市教育委員会参事兼文化課長）
理事	伊藤賢司	（土浦市都市整備部建築指導課長）〔平成18年度〕
	奥山政夫	（土浦市都市整備部建築指導課長）〔平成19年度〕
理事	大塚 博	（土浦市文化財保護審議会委員）
監事	堀越昭二	（土浦市博物館協議会委員）
監事	久松一夫	（土浦市教育委員会参事兼総務課長）〔平成18年度〕
	折本 茂	（土浦市教育委員会総務課長）〔平成19年度〕
事務局長	今泉登至	（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）〔平成18年度〕
	市村秀雄	（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）〔平成19年度〕
事務局員	石川 功	（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長）
	黒澤春彦	（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長）

堀部 猛 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長)
比毛君男 (土浦市教育委員会文化課主幹)
由水寿美代 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事)

事務局員兼出納員

関口 満 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長)

○ 発掘・整理作業

調査主任 関口 満

調査員 福田礼子 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員) [平成18年度]

作業員 (発掘作業) 新井栄子 大坪美知子 川田光子 小松崎廣子 露久保三郎 友部政夫
浜田久美子

(整理作業) 新井栄子 大坪美知子 川田光子 小松崎廣子 浜田久美子

凡 例

1. 遺構・土層に使用した記号は次のとおりである。

(遺構) S I : 穫穴住跡 S B : 捩立柱建物跡 S F : 燃土跡・火葬施設跡 S D : 溝跡

K : 扰乱 P : ピット

2. 遺構・遺物実測図中の表記は以下のとおりである。

(遺構) 燃土及び被熱範囲 炭化物範囲 土器 ● 銅鏡 ▲ 骨片 □
(遺物) 織維混入繩文土器 須恵器 灰釉及び自然釉

3. 土層観察と遺物における色調の同定は、『新版標準土色帖』(小山正忠 竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

4. 本書の遺構・遺物の記述は以下を原則としている。

(1) 水系レベルは海拔高度(m)を示す。

(2) 遺物番号は本文・表・写真図版とも一致する。

(3) 遺構の縮尺は1/60・1/30を基本とし、これ以外の縮尺についても個別にスケールを付していく。

(4) 遺物の縮尺は原則として土器は1/3、土製品は1/2、石器は原寸とし、これ以外の縮尺についても個別にスケールを付している。

(5) 遺構の「主軸方向」は竪穴住跡の場合カマドの長軸線から、それ以外の遺構は左右対象となる長軸が座標軸からみてどの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例:N-25°-W)。

(6) 遺構の計測値で()で表現されているものは残存値である。同様に、遺物観察表中の()は残存値、[]は復元値を表す。

(7) 住跡の規模は遺構上場の数値である。

目 次

卷頭写真（第2号住居跡カマド遺物出土状況・第1号火葬施設跡・第1号火葬施設跡遺物出土状況）

序

例言

凡例

日次

第1章 経過.....	1
第1節 調査の経過.....	1
第2節 発掘作業及び整理作業等の経過.....	4
第2章 遺跡の位置と環境.....	5
第1節 地理的環境.....	5
第2節 歴史的環境.....	5
第3章 調査方法と成果.....	9
第1節 調査の方法.....	9
第2節 基本層序.....	9
第3節 遺構と遺物.....	11
1. 竪穴住居跡.....	11
2. 掘立柱建物跡.....	20
3. 火葬施設跡.....	22
4. 焼土跡.....	22
5. 溝跡.....	26
6. ピット群.....	26
7. 遺構外出土遺物.....	29
第4章 総括.....	31
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 諏訪窪遺跡周辺の地形図	2
第2図 諏訪窪遺跡確認調査状況図	3
第3図 周辺の遺跡位置図	6
第4図 基本層序	9
第5図 遺構配置図	10
第6図 第1号住居跡・出土遺物	12
第7図 第2号住居跡	14
第8図 第2号住居跡遺物カマド	15
第9図 第2号住居跡出土遺物	16
第10図 第3号住居跡・出土遺物	18
第11図 第4号住居跡・出土遺物	19
第12図 第1号掘立柱建物跡	21
第13図 第1号火葬施設跡・出土遺物	23
第14図 第1～4号焼土跡	24
第15図 第1・2号溝跡・出土遺物	27
第16図 ピット群	28
第17図 遺構外出土遺物	30

写真図版目次

PL 1 調査前風景（北東より） 基本層序（北壁） 第1号住居跡	
PL 2 第2号住居跡 第2号住居跡遺物出土状況 第2号住居跡カマド	
PL 3 第2号住居跡カマド土層断面 第2号住居跡カマド遺物出土状況	
PL 4 第3号住居跡 第3号住居跡遺物出土状況 第4号住居跡	
PL 5 第1号掘立柱建物跡・ピット群 第1号溝跡 第2号溝跡	
PL 6 第1号火葬施設跡 第1号火葬施設跡炭化物等確認状況 第1号火葬施設跡遺物出土状況	
PL 7 第1号焼土跡 第3号焼土跡 第4号焼土跡	
PL 8 調査区近景（南から、手前第2号住居跡） 調査区遠景（北東から） 作業風景	
PL 9 諏訪窪遺跡出土遺物（1）	
PL10 諏訪窪遺跡出土遺物（2）	
PL11 諏訪窪遺跡出土遺物（3）	

第1章 経過

第1節 調査の経過

今回の調査は、社会福祉法人 幸樹会が上高津地内で計画する保育園建設事業に伴うものである。その発端は、2005（平成17）年2月に事業者より土浦市教育委員会（以下市教委）に事業計画の提示とその事業予定地に存在する埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。このことを受け、市教委では遺跡地図との照合や現地踏査を行った。その結果、事業予定地は周知の遺跡である諏訪窪遺跡にかかり、現状は台地上が山林で、谷部が畠地となっており、遺物は畠地で若干採集することができた。

事業者に対しては事業予定地が諏訪窪遺跡にかかることを説明し、早い段階で埋蔵文化財の確認調査を行うことで合意した。そして、遺跡の取り扱いについては、確認調査の状況をもとに工事内容と照合し検討したい旨を事業者に伝えた。

埋蔵文化財の確認調査は、2005（平成17）年3月12日に土浦市上高津1798-2、1800-1の土地に4本のトレチ（埋蔵文化財確認調査用溝）を設定して、重機を用いて行った。調査を行った土地は、その多くが台地上の山林部分であるため、樹木のまばらな部分を中心に3本のトレチを設定した。加えて、谷部の畠地にも1本のトレチを設定した。その調査結果、台地上のトレチから竪穴住居跡2軒（古墳時代1、時期不明1）と焼土跡が2基確認され、その北端では埋没谷らしいものが確認された。このほか、谷部に設定したトレチでは黒色土の厚い堆積が見られたものの、埋蔵文化財は確認されなかった。この調査で出土した遺物は非常に少なく、土師器小片などが出土したのみである。

この調査結果については文書にて事業主に回答し、谷部を除いた台地上の土地において切り土を伴う工事などを行う場合には、発掘調査が必要となることをお話しした。その後、この埋蔵文化財に関わる取り扱い協議は事業の関係で一時中断となる。

その後、2006（平成18）年3月に、事業者から事業地内の建物建設計画図が提示され、事業地の面積が確定し建物位置や工事内容が明らかとなった。同時に事業者からは、この土地における埋蔵文化財の発掘調査を実施した場合の期間や費用の問合せがあり、市教委では確認調査状況を勘案し県積算基準に基づいた費用や期間の積算を行い、事業者に提示した。この内容については事業者で了解し、発掘調査に向け動き出すことになる。

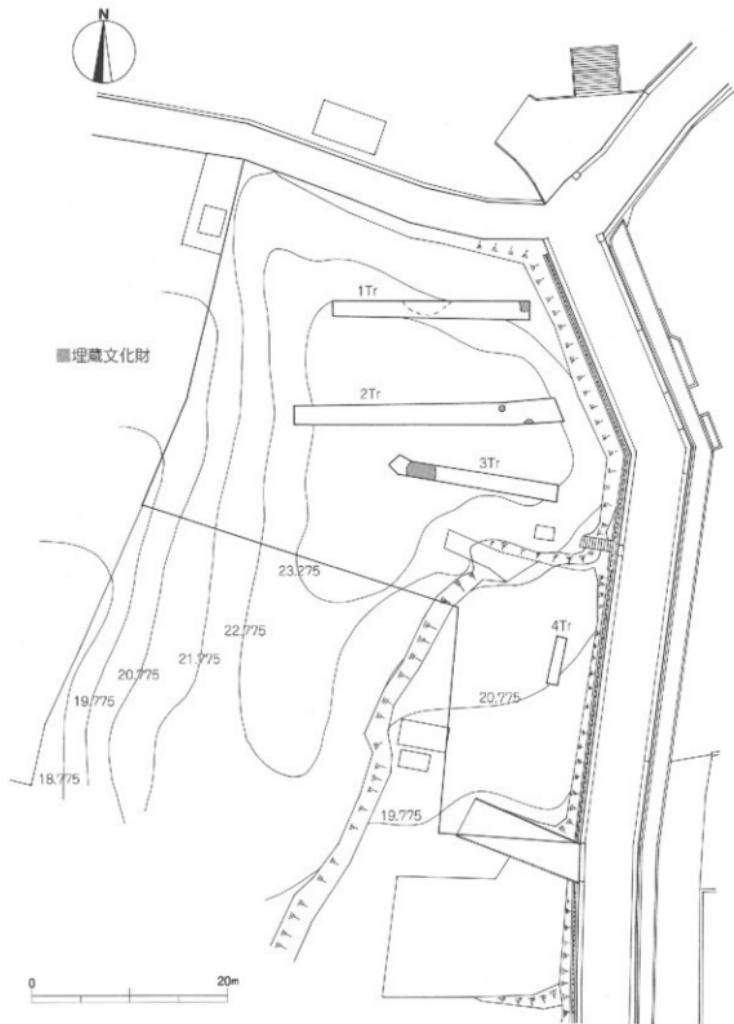
この諏訪窪遺跡調査のための法的な手続き等については、まず文化財保護法第93条第1項の埋蔵文化財発掘の届出を2006（平成18）年4月12日に県教育長宛進達した。その後、今回の発掘調査を実施するため諏訪窪遺跡調査会を組織し、同調査会から提出された法第92条第1項の埋蔵文化財発掘調査の届出を5月10日付けて県教育長宛進達した。そして、実際の発掘調査にあたり5月26日付けで事業者と同調査会との間で委託契約書を締結し、6月13日から発掘調査を開始した。この発掘調査は7月4日まで行い、7月12日付けで県教育長宛に発掘調査の終了確認依頼を進達した。

なお、開発事業地内の台地上には当初の土地利用計画上埋蔵文化財の現状保存が可能な土地が存在したが、遺跡範囲内ではあるものの地下に埋蔵文化財が存在するかは明確でない土地であり、表土排除時に同所についても遺構確認を行った。その結果、遺構がほとんど確認されないため、本調査対象エリアに含めた。

（関口 満）



第1図 講訪窯遺跡周辺の地形図



第2図 諏訪塙遺跡確認調査状況図

第2節 発掘作業及び整理作業等の経過

2006（平成18）年

- 6月6日 表土排除開始。
- 9日 表土排除終了。
- 12日 方眼杭設置。
- 13日 器材搬入、発掘調査開始。標高杭設置。遺構確認。
- 14日 確認調査トレンチの痕跡を確認。同調査時に判明していた竪穴住居跡も同時に確認する。
- 15日 調査区南端で第2号住居跡確認。確認済みの遺構（第1・3号住居跡）を掘り下げる。
- 17日 第3号住居跡カマド付近より鉄製鎌出土。
- 20日 グリッド杭打ち。焼土跡精査。
- 21日 第1号火葬施設跡から「天聖元寶」ほか計5枚の銅錢が重なって出土。
- 22日 第3号住居跡完掘。第2号住居跡掘り下げ開始。
- 23日 第1号住居跡完掘。
- 24日 第1号掘立柱建物跡・第1号溝跡・ピット群平面図実測。
- 27日 第2号住居跡土層観察。
- 28日 基本層序確認のためのトレンチ掘削。
- 29日 第2号住居跡出土状況写真撮影。同カマド調査開始。
- 30日 第2号住居跡カマド内より壺が横位に潰れた状態で出土。基本層序実測後撮影。埋め戻し。
- 7月1日 第2号住居跡カマド完掘。
- 4日 調査区全景写真撮影。第1号住居跡埋め戻し。器材撤収。調査終了。
- 11日 整理作業開始。遺物の洗浄。
- 20日 遺物の洗浄、遺物台帳作成。
- 21日 写真台帳・図面台帳作成。
- 27日 遺物の注記、遺物の接合。
- 28日 遺物の接合、実測遺物の選別。
- 8月3日 遺物実測台帳作成、遺物の復元、遺物の実測。写真台帳整理。
- 4日 土器の採拓、遺物実測。
- 10日 遺構の鉛筆トレース。
- 31日 遺構トレース開始。
- 9月7日 遺物実測終了。計測表、遺構配置図作成。日誌のまとめ。
- 13日 遺物トレース開始。遺構分布図作成。版下作成。
- 14日 遺構トレース終了。
- 21日 遺物トレース終了。
- 22日 版下作成終了
- 10月～11月 原稿執筆。

(福田礼子)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第3図）

諏訪窟遺跡は、土浦市上高津1798-2外に所在している。

この遺跡の所在する土浦市は茨城県南地区のほぼ中央に位置し、北部には筑波山塊から南東に伸びる新治台地、中央部は古鬼怒川により形成された桜川低地（現在の桜川流域）、東部には霞ヶ浦の土浦入り、南部は筑波稲敷台地から成り立っている。周辺市町村は平成16・17年度のいわゆる平成の大合併により、その範囲・名称が大きく変化しており、土浦市は北西部に位置していた新治郡新治村との合併を果たしている。新治村と接していた新治郡八郷町が石岡市と合併したため、以前は接していない石岡市が新たに市境となっている。北部から東部に位置しているのはかすみがうら市で、旧新治郡霞ヶ浦町と旧新治郡千代田町が相当する。西部と南部は変化がなく、つくば市・牛久市・稲敷郡阿見町と接している。

諏訪窟遺跡は、桜川右岸の標高22~23mの筑波稲敷台地上に位置している。周辺の地形は桜川低地から入り込む谷により開析が進み、複雑な樹枝状を呈しており、小規模な独立丘を形成している。この独立丘のひとつに本遺跡は立地し、北方や南方方向から谷が複雑に入り込んでいることが分かる。この遺跡の所在する上高津や宍塙地区は市内でも里山の自然が良く残された地域であり、その中には宍塙大池も存在する。その反面、遺跡の南方を東西方向に走る県道土浦坂東線沿線は市街化が進んできている。そして、先の県道が出来る以前には遺跡の北側を東西方向に走る市道が、上高津地区内の主要な道路となっていたようである。

第2節 歴史的環境（第3図）

諏訪窟遺跡（1）の所在する上高津地区の周辺には各時代の遺跡が数多く確認されている。ここでは、上高津地区及びその周辺に所在する遺跡について時代を追って概観することにする。

旧石器時代の明確な遺跡は現在のところ確認されていない。しかしながら、寄居遺跡（12）の発掘調査では構造外出土遺物として頁岩製の角錐状石器や石刃、そして剥片が比較的まとまって出土している。

縄文時代の遺跡としては、国指定史跡の上高津貝塚（2）を筆頭に、日光入遺跡（3）、貝塚南遺跡（4）、栗塚遺跡（18）などで発掘調査や試掘確認調査を通じてこの時代の遺構・遺物が確認されている。このほかにも遺物のみが確認されている遺跡は非常に多い。これらの遺跡で確認された遺物の時期は、上高津貝塚をのぞいて縄文時代前期から中期のものがほとんどである。

弥生時代の遺跡では発掘調査事例としてうぐいす平遺跡（13）があり、堅穴住居跡が確認され銅鏡が出土している。このほか、確認調査を通じて向山遺跡（7）や新町遺跡（14）で構造・遺物が確認されている。

古墳時代の遺跡は、弥生時代の遺跡の数に比べ増加する様子が窺える。この地域の発掘調査事例としては、集落跡として寄居遺跡（12）、うぐいす平遺跡（13）があり、墳墓として宍塙古墳群18号墳（根本古墳）（6）などがあげられる。寄居遺跡では前期から後期の堅穴住居跡が検出され、前期の出土遺物として南関東系や北陸系の土器が出土しており特筆される。うぐいす平遺跡でも前期の堅穴住居跡が検出され、玉作りに関連する筋砥石や内磨き砥石が出土していることが興味深い。墳墓としては宍塙地区の大池周辺に宍塙古墳群が存在し、25基の円墳や前方後円墳が確認され、上高津地区内には幕下女籠古墳（11）が存在する。

奈良時代や平安時代の遺跡については、まず、諏訪窟遺跡に近接した上高津貝塚（2）の台地上北側にあ



第3図 周辺の遺跡位置図

たるC地点では、縄文時代の遺構とともに奈良時代や平安時代の堅穴住居跡や溝跡が確認されている。この堅穴住居跡の一つでは8世紀前葉の土師器壺や須恵器壺が出土し、溝跡からは9世紀後半代の土師器高台付壺や線刻のある土師器が出土している。そして、遺構外出土遺物には7世紀末から8世紀代の遺物が日立って出土しており、これらの時期の集落跡が展開している様子が窺える。そして、寄居遺跡(12)では8世紀前半から9世紀後半にかけての堅穴住居跡が検出され、うぐいす平遺跡(13)でも8世紀前半から11世紀代の堅穴住居跡が検出されている。また、新町遺跡(14)の確認調査では平安時代の堅穴住居跡が確認されている。このように見てみると、上高津地区的台地上には8世紀前半代の遺跡が広がりをもって展開していることが理解できる。この時代の特徴的な出土遺物として、寄居遺跡やうぐいす平遺跡では灰釉陶器の長頸瓶類や碗・皿類が比較的まとまって出土している。また、うぐいす平遺跡で出土した須恵器(特に大甕など)の胎土には、新治窯産須恵器とは異なる特徴を持つものが存在し興味深い。

このほかに、上高津八幡遺跡の土地からは以前に2体の小金銅仏が出土したという伝承がある。2003年に同遺跡で確認調査が実施されたが、このような伝承を裏付ける遺構や遺物は確認されていない。

中世の遺跡としては、宮脇B遺跡(16)や寄居遺跡(12)がある。宮脇B遺跡では溝跡が調査され、その中から橋脚状の柱跡が確認され注目される。出土遺物としては、土師質土器の小皿、内耳鍋、擂り鉢などが大多数を占め、陶磁器は非常に少ない。このほかの出土品として、石製品の宝鏡印塔や石臼、火打石が出土している。これらは15世紀代のものと考えられる。また、寄居遺跡では調査区の南側を中心に地下式壙や方形堅穴造構、そして溝跡が確認されている。このほか、銭や人骨が出土した土壙墓らしいものも検出されている。それらからは土師質土器の小皿や内耳鍋・擂り鉢が出土し、出土遺物の大半を占める。このほかに、

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	遺跡の時代							備考
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	
1	観訪塗遺跡		○			○		○	1987確認調査
2	上高津貝塚	○	○			○			1990~91発掘調査等
3	日光入道跡		○						1987確認調査
4	貝塚南遺跡		○		○				1987確認調査
5	出シ山遺跡	○		○		○			
6	央塚古墳群18号墳				○				1979発掘調査
7	向山遺跡			○					1987確認調査
8	勢至久保遺跡	○	○						1987確認調査
9	五斗跡遺跡	○			○				1987確認調査
10	蛭田遺跡	○	○		○				1987確認調査
11	墓下女騎古墳				○				
12	寄居遺跡	○	○		○	○	○		1992一部発掘調査
13	うぐいす平遺跡	○	○	○	○	○			1992一部発掘調査
14	新町遺跡		○	○		○	○		2002確認調査
15	上高津八幡遺跡					○		○	2003確認調査
16	宮脇B遺跡		○				○		1996一部発掘調査
17	宮脇A遺跡					○			
18	薬崎遺跡	○	○		○				1986確認調査
19	グミヌキ遺跡		○	○	○				1987確認調査
20	蛭屋久保C遺跡	○	○	○	○				1987確認調査

○主体となる時代、○遺物が確認される時代

陶磁器では青磁や古瀬戸破片が出土している。これらは15世紀代のものと考えられている。

上記の遺跡以外に中世の痕跡として、上高津地区内には五輪塔部材の集積が見られる墓地が所々で見られ、この土地における当時の人々の営みの片鱗が窺われる。

参考文献

- (財)茨城県教育財団「寄居遺跡 うぐいす平遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告書第84集 1994
上高津貝塚ふるさと歴史の広場『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第3号（平成8年度） 1999
上高津貝塚ふるさと歴史の広場『第4回特別展 焼き物にみる中世の世界』1999
茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』2002
上高津貝塚ふるさと歴史の広場『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第9号（平成14年度）2004
土浦市教育委員会『国指定史跡 上高津貝塚C地点－史跡整備に伴う発掘調査報告書－』 2006

(関口 満)

第3章 調査方法と成果

第1節 調査の方法 (第5図)

今回の調査は約1,200m²の調査区を設定して行なった。開発エリア内の南側にあたる谷部は周知の遺跡の範囲内であったが、確認調査で遺構・遺物が確認されなかつたため、本調査範囲から除外した。表土除去は重機によって行なつた。遺構確認は台地上で関東ローム層上面、傾斜部では砂層や粘土層上面となつた。

遺構の調査は土層観察用ベルトを設定して覆土を排除し、写真撮影・実測の後、土層ベルトを排除した。遺構内の諸施設については適宜土層観察や記録の作成を行い、完掘写真撮影・実測を行い、見通し図作成も行つた。遺構図の縮尺は1/20・1/10を基本とした。遺構内出土遺物については写真撮影後、平面図を作成し、その標高も記録した。遺構の記録写真是モノクロームとリバーサルフィルムを用いて撮影した。

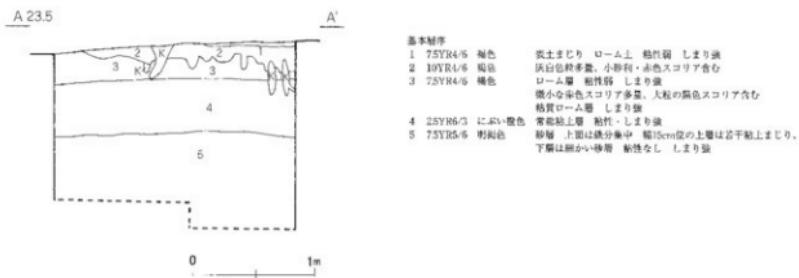
諫訪窓遺跡の調査区の設定にあたつては、調査区内に日本平面直角座標第IX系を基に20m間隔の基準杭4ヶ所を設置した。これらを基に5m×5mの方眼を組み、西から東へA~H、北から南へ1~9と振つた(例:A-1グリッド)。これらの基準杭はグリット名称設定後のC-3、G-3、C-7、G-7区の杭にあたる。グリットの呼称はその北西角をもつて表記した。C-3グリットの座標はX=8100、Y=30400である。

第2節 基本層序 (第4図 PL1)

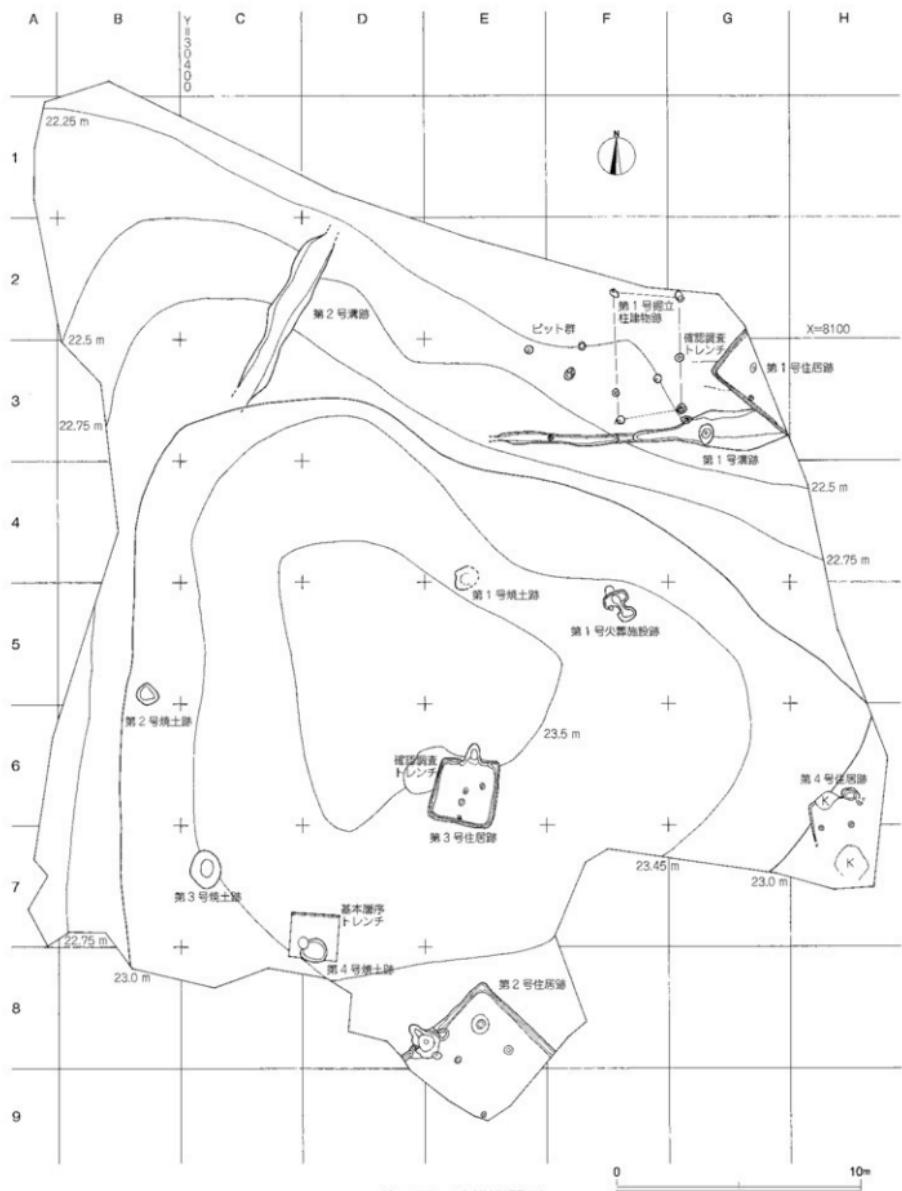
調査区南側、標高23.45m付近に基本層序を観察するため2×2mの試掘坑を掘削した。ローム質土の堆積が比較的厚い地点を選択したところ、第4号焼土跡と重複してしまい土層観察を優先させることとなつた。試掘坑内では北・東壁面で堆積土層の観察を行なつた。その結果、北・東壁面ともほほ同様の所見が得られたため、ここでは北面の上層内容について述べることとする。

基本層序の特徴としては、関東ローム層や上層の表土層が非常に薄いことがあげられる。通常市内の台地上における関東ローム層の堆積は概ね1m~1.5mの厚さが存在するが、本遺跡の場合は20cm程度であった。これは、本遺跡の占地する台地の平垣面が狭く、その多くが緩い傾斜地となっていることから、本来堆積していたであろう関東ローム層がだいぶ流失していることを反映している。

(福田礼子)



第4図 基本層序



第5図 遺構配置図

第3節 遺構と遺物

調査区内からは竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、火葬施設跡1基、焼土跡4基、溝跡2条、ピット群1ヶ所が確認されている。

1. 竪穴住居跡

調査区の東側に4軒の住居跡が確認された。確認された竪穴住居跡は奈良時代が3軒（第1・2・3号住居跡）、平安時代1軒（第4号住居跡）であった。

第1号住居跡（第6図 PL1・9・10）

位置 調査区北東端、G-2・3グリッドに位置している。住居跡の南西壁が第1号溝跡と重複しており、覆土の観察から本住居跡が古いことが判明した。本遺構は2005（平成17）年の確認調査でその存在が確認されていた。標高は22.25mである。

平面形・規模 住居跡の大半が調査区外となるが、方形を呈すると思われる。長軸（4.05）m、短軸（2.33）mを測る。

主軸方向 N-55°-W（後述するカマド位置より推定）。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁面 住居跡の大半が調査区外にあたるため、北西壁・南西壁のみが確認された。第1号溝跡と重複する南西壁の一部は壊されている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの最深部は37cmを測る。壁溝は南北壁際で途切れているがほかは全周しており、幅10~21cm、深さ4~6cmを測る。

床面 ほぼ平坦である。明瞭な硬化面は確認できなかった。調査区壁面に沿ってサブトレーンチを入れたところ、砂層が検出されたため砂層上面を床面とした。第1号溝跡との重複は床面に及んでいない。

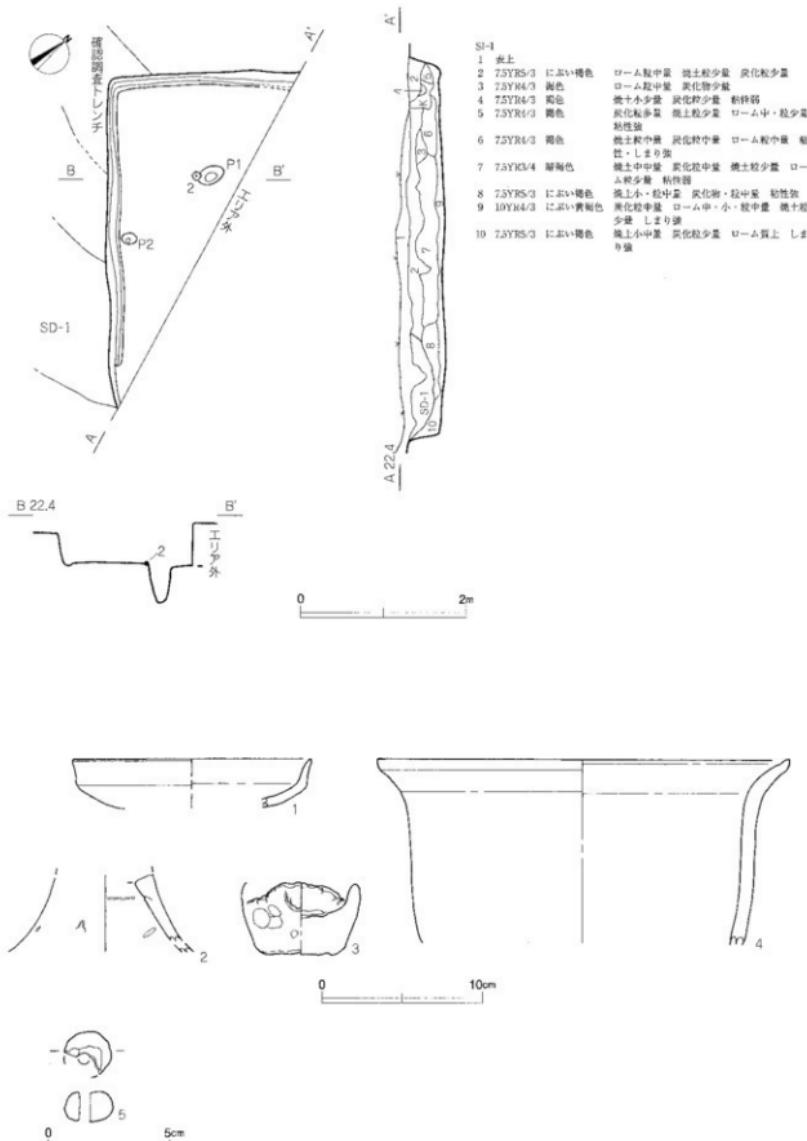
ピット 2基確認された。配置と規模からP1は主柱穴と考えられる。平面形は梢円形を呈し、35×22cm、深さ48cmを測る。上面の縁から2の土師器の高坏片が出土している。P2は補助的な柱穴となろうか。円形を呈し、19×14cm、深さ25cmを測る。

カマド 今回の調査で確認されていないが、1995（平成7）年度の調査区東側の擁壁工事の際、工事法面から焼土と土製支脚が出土しており、おそらく北西壁にカマドが構築されていたと考えられる。主軸方向の決定にはこの状況を考慮した。

第1号住居跡

調査番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技術の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	土師器 壊	口径 [14.6] 器高 (3.0)	体部と口縁部の境に棱をもつ、口縁部にかけて崩く外反する。底部はおそらく丸底であろう。	遺存状態不良のため、観察できなかった。	長石・石英・雲母・赤色 少量 内外面褐色 普通	15% 覆土
第6図 2	土師器 高坏	高 (47)	脚部である。上半は直立気味となり、脚部にかけて緩やかに曲げている。	内面は輪穂が有段状を呈し、ここに物置板がみられた。内面下半は複数のヘラナゲ、外縁は遺存状態不良のため不明である。	石英・赤色粒中量、長石・雲母少許 内外面に青褐色 普通	70% 床面直上
第6図 3	手づく ね土器	口径 [7.2] 底径 [4.2] 器高 4.4	底部は平坦、外傾して立ち上がり、口縁部は崩く内凹している。底部は厚く、蓋高の半分を占めている。口縁部は大きく被打破っている。	粘土地を門ませて手づくね成形。	長石中量、石英・雲母 少量 内外面にぶい 黄褐色 普通	25% 覆土
第6図 4	土師器 壊	口径 [25.2] 器高 (11.4)	体部は平らから緩やかに外傾している。底部は崩く、口縁部は外反し、口唇部は崩く直立気味となる。	遺存状態不良だが、内外面ナデか。	石英多量、雲母中量、 長石少量 内外面に ぶい 黄褐色 普通	15% 床上

調査番号	器種	法量 (cm・g)				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		底幅	横幅	厚さ	重量			
第6図 5	土製品 土玉	(1.7)	(1.9)	1.3	(2.2)	上下面は崩れで、側面は渋曲している。 全面ナデ。孔の径は0.5cmである。	長石・石英・赤色粒少量 にぶい 黄褐色 普通	70% 覆土



覆土 10層に分層された。混入物から覆土中位以下（第5～10層）は埋め戻しを行なった可能性がある。

出土遺物 床面直上から2が出土するほかは、全て覆土中位からの出土である。3は手づくね土器である。

5の土製品を除き、全て土師器であった。これらは器面が軟質で水洗により磨耗したものが多く、調整の観察は困難であった。

所見 1の土師器坏の形状から、時期は7世紀末葉から8世紀前葉の範囲と判断した。住居跡の時期も概ね該期に相当すると考えられる。

第2号住居跡（第7～9図 PL2・3・9～11）

位置 調査区南端、D～F-8・9グリッドに位置し、南側は今回の事業地外になるため未調査である。本遺構は2005（平成17）年の確認調査でその存在が未確認であった。標高は23.0mである。

平面形・規模 方形を呈し、長軸（4.62）m、短軸（4.30）mを測り、推定では一辺8mを超える大型の住居跡と考えられる。

主輪方向 N-47°-W。住居跡の四隅が概ね東西南北を向いている。

壁面 住居跡の3/4程が調査区外に当たるため、北西壁・北東壁の一部が確認されたに留まる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最深部は確認面から71cmを測る。調査範囲では壁溝は全周しており、幅11～31cm、深さ6～10cmを測る。

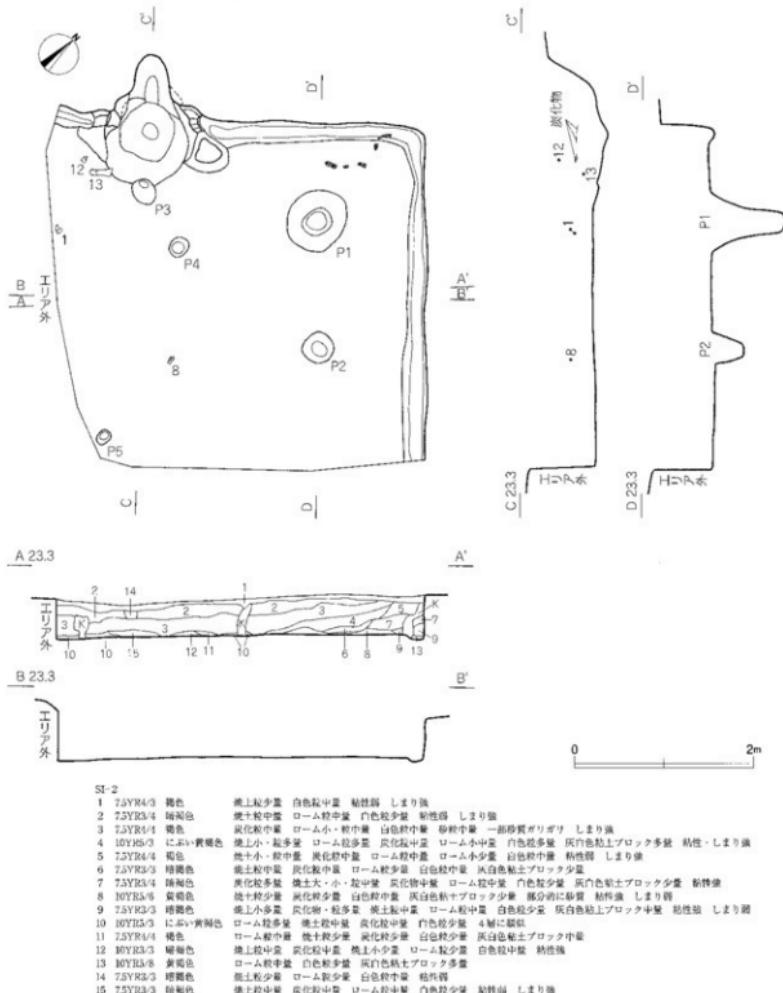
床面 ほぼ平坦であり、常能粘土層中まで掘り込む。北壁隅を中心炭化物と焼土の堆積が確認された。特にカマド東側と北東壁のコーナー寄りの周溝部上面を覆うように炭化物が堆積している。

ピット 5基確認された。配置と規模からP1は主柱穴と考えられる。平面形は梢円形を呈し、80×70cm、深さ91cmを測る。底面から中位まではほぼ垂直に、上方に向かっては外傾して立ち上がっている。P2は補助的な柱穴となるか。円形を呈し、33×27cm、深さ38cmを測る。P3はカマドの燃焼部と重複しており、性格は不明である。梢円形を呈し、33×27cm、深さ7cmを測る。上面と底面は相似形を成さず、底面はカマド寄りに位置している。P4は円形を呈し、26×23cm、深さ64cm、P5は同じく円形で19×15cm、深さ16cmを測る。

カマド 北西壁に構築されている。壁下場から1.01m程壁外に掘り出されて煙道部が構築される。全長約1.61mで燃焼部は床面から13cm程掘り込まれ、奥壁は外傾して立ち上がっている。奥壁は被熱により著しく赤変していた。両袖は砂混じりの灰白色粘土で、硬く締まっていた。住居壁に接する部分は良好に確認されたが、床面に張り出す部分は調査時に若干削ってしまっている。焚き口幅は85cmを測る。遺物は燃焼部ほぼ中央に10の完形の甕、その下位にも11の甕の計2点が出土している。10は口縁部を床面中央側に向けた倒位状態で、燃焼部底面から18cm程浮いた位置で出土した。また、12の土師器甕底部片や13の土製支脚が左側袖付近から出土している。覆土は17層に分層された。第2層は灰白色粘土で天井部の可能性が考えられる。第5層は天井部の被熱箇所の崩落土か。カマド調査後に構造を確認したところ、袖部は直線的な壁に取り付けられているのではなく、袖となる壁の部分を半月状に掘り込んでいることが判明した。

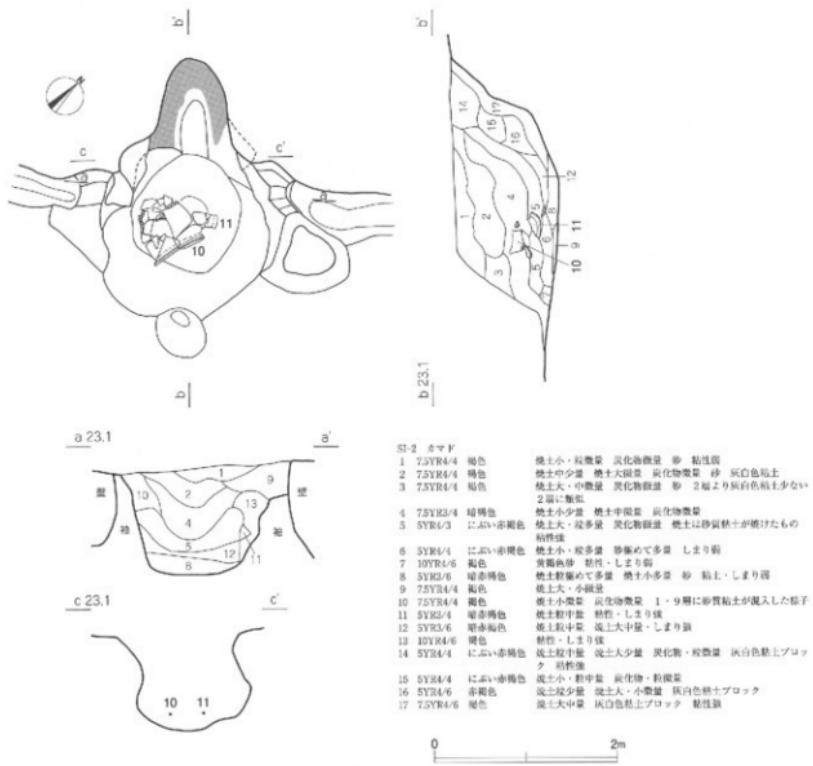
覆土 15層に分層された。第7・9層は混入物の状況から焼土・炭化物を壁際に投棄したものと考えられ、第3層より下層は埋め戻しを行なった土層である可能性が考えられる。

出土遺物 カマド周辺から出土した遺物以外は、大半が覆土中位からの出土したものである。土師器は器面が軟質で水洗によって磨耗しているものが多く、調整観察は困難であった。1～5は土師器の坏・椀類で、口径の大小は見られるもののほとんどが丸底と考えられる。6～9は須恵器の坏と蓋である。7の坏底部の



第7図 第2号住居跡

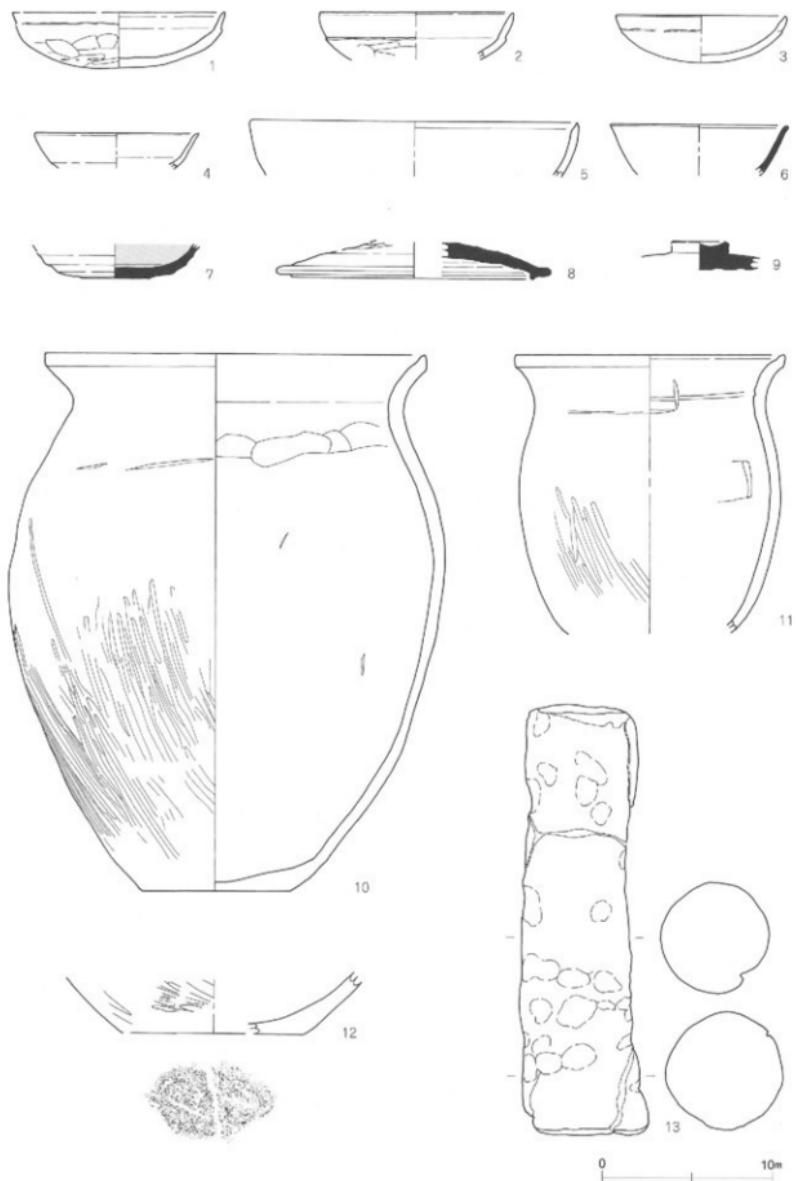
接地面は狭い特徴がある。8の蓋の縁辺裏側には返りが明瞭に付けられ、9の蓋つまみは平たいボタン状のものとなっている。10・11・12は土師器壺で11は小型のものである。いずれも口縁部はつまみ上げられ、胴部にはヘラミガキが施される常総壺の特徴をよく示している。13は土製の支脚である。そして、写真図版で示した炭化種子（ウメか？）が出土している。



第8図 第2号住居跡力マド

第2号住居跡

固版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	挿法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9回 1	土師器 壺	口径 器高 13.0 3.5	体部と口縁部の境に後をもち、口部にかけて直立気味に外傾する。底部は丸底で、体部から弱く内溝している。	体部は横位のヘラ削り、遺存状態不直だが口縁部と内面はナデと思われる。	長石・石英・赤色较少 内外面銀色 鮎通	80% 覆土下位
第9回 2	土師器 壺	口径 器高 [11.8] (2.9)	体部と口縁部の境に後をもち、口部にかけて外傾する。	体部は横位のヘラ削り、遺存状態不直だが口縁部と内面はナデと思われる。	長石・石英・赤色较少 外面黒褐色 内面に ぶい黄褐色 普通	15% 覆土 外面黒色多埋
第9回 3	土師器 壺	口径 器高 [10.4] (2.9)	底部は丸底で、内溝して立ち上がる。口唇部は先細り状を呈する。	遺存状態不良のため、観察できなかつた。	長石・石英・雲母少 量 内外面銀色 普通	25% 覆土 内外面銀色剥落
第9回 4	土師器 壺	口径 器高 [9.8] (2.2)	体部と口縁部の間に弱い棱をもち、口部にかけて外傾する。器底に対する口縁部の結合は半分以上と思われる。	遺存状態不良のため、観察できなかつた。器底は薄い。	長石・石英・雲母・赤色 粒少量 内外面にぶ い褐色 普通	20% 覆土
第9回 5	土師器 壺	口径 器高 [20.0] (3.4)	外傾して立ち上がり。口唇部は先細り状を呈する。内面に弱い棱をもつ。	遺存状態不良のため、観察できなかつた。	長石・石英・雲母・赤色 粒少量 内外面銀色 普通	10% 覆土
第9回 6	須恵器 壺	口径 器高 [10.8] (3.1)	体部下半から外傾して立ち上がり、口唇部は斜く外反する。	体部は圓転ナデ。	長石中量、雲母・石英 少 量 内外面オリ ブ灰色 普通	20% 覆土



第9図 第2号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法規 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 7	須恵器 壺	底径 高 〔42〕 〔20〕	底部は平底で、内溝して立ち上がる。	底面は切り離し後ナデ、体部はクロロ目が良く残る。底部直上は反時計回りの回転ヘラ削り。	長石中量、石英少量 黒色粒、内外面灰白色 普遍	覆土、内面極薄 い自然釉
第9図 8	須恵器 蓋	口径 器高 〔16.8〕 〔2.2〕	体部は直線的に開く、口縁部にかけて弱い屈曲を有する。口縁部内側に小さな返りが付く。	体部は回転ナデ、体部上位は反時計回りの手持ちヘラ削り。	長石・石英多量、雲母 中量 内外面灰白色 普遍	70% 覆土下位
第9図 9	須恵器 蓋	つまみ徑3.5 器高 〔1.7〕	体部は直線的に開く。つまみは筋半なつくりで、ボタン状となる。	反時計回りの回転ナデ。	石英、雲母中量、長 石少量 内外面浅灰色 普遍	10% 覆土
第9図 10	土師器 壺	口径 底径 器高 〔23.3〕 9.0 33.0	底部は平底で、体部にかけて緩やかに内溝する。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反して立ち上がる。口唇部は短く直立している。	外面上半はナデ、下半は斜削のヘルミガキ、内面頭部付近はヘラ削り。他は横棒のヘラナデ。	長石・石英多量、雲母 赤色粒中量 内外面 橙色 普通	ほぼ完形 カマド内
第9図 11	土師器 壺	底径 器高 〔16.5〕 〔17.0〕	体部は緩やかに内溝し、屈曲の弱い頸部から口縁部は外反して立ち上がる。口唇部は短く直立している。	外面上半はナデ、下半は斜削のヘルミガキ、内面模様のヘラナデ。	石英多量、長石・雲 母中量 内外面にぶ い黄褐色 普通	30% カマド内
第9図 12	土師器 壺	底径 器高 〔11.2〕 〔3.3〕	底部は平底で、外傾して立ち上がる。	外表面は斜位のヘルミガキ、内面横 位のヘラナデ。	長石・石英、雲母中量 内外面橙色 普遍	20% 覆土中位 底部木炭痕

図版番号	器種	法規 (cm・g)				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		幅	横幅	厚さ	重量			
第9図 13	土瓶 文脚	(26.5)	(7.5)	(7.3)	(1300.0)	やや瓶底が丸い円柱状の支撑。手づくね 成形。全面に指痕痕が残る。	長石・白色粘土中量 褐色 普通	ほぼ完形 カマド焼跡

所見 本遺構から出土した須恵器の蓋の諸特徴は、栗山窯跡段階のものよりはやや新しい様相を持つものと思われることから、8世紀前葉頃のものと考えられる。それ以外の土師器などについても、同様な時期のものと想定され、住居跡の時期も概ね該期に相当すると考えられる。

第3号住居跡（第10図 PL4・11）

位置 調査区中央やや南寄り、E-6グリッドに位置している。他の遺構との重複ではなく、2005（平成17）年の確認調査でその存在が確認されていた。標高は23.5mで、調査区内の最も高い位置で確認された。

平面形・規模 方形を呈し、長軸2.73m、短軸2.66mを測る。

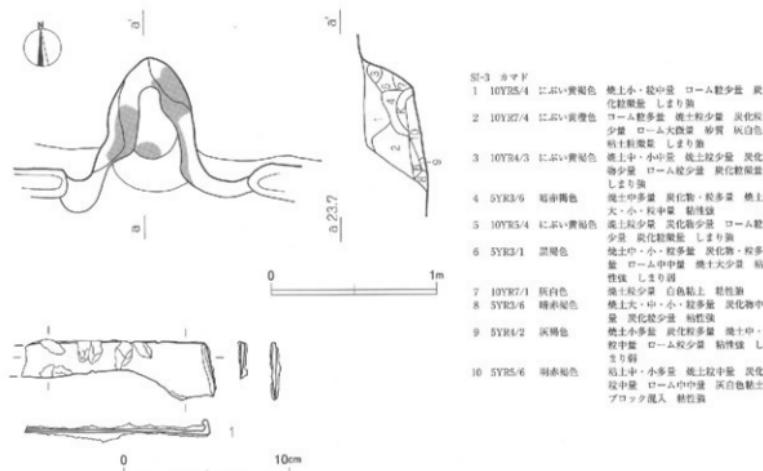
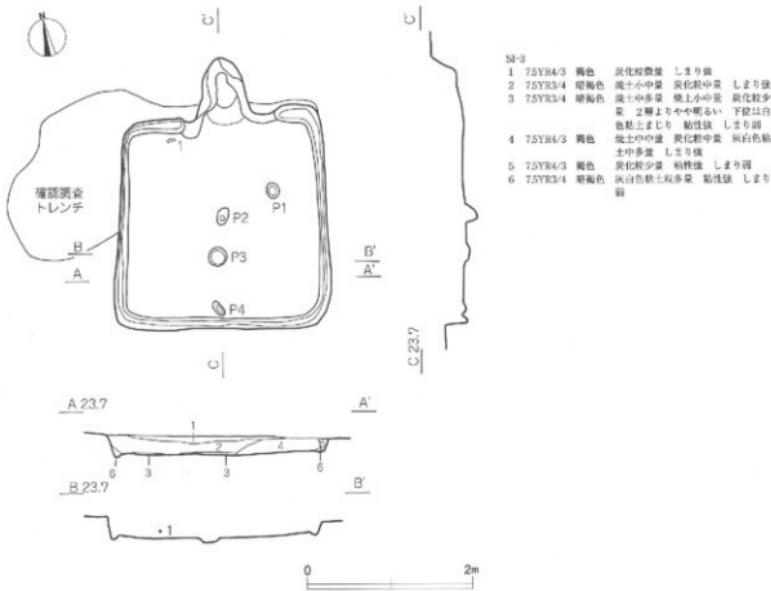
主軸方向 N-11°-E、ほぼ南北方向である。

壁面 壁は全面確認できた。ほぼ垂直に立ち上がり、最深部は確認面から43cmを測る。壁溝は全周しており、幅8~29cm、深さ1~7cmを測る。

床面 ほぼ平坦である。明瞭な硬化面は確認できなかった。住居跡は常緑枯立層まで掘り込まれており、粘土層上面に焼土・炭化物範囲がみられたことから、ここを床面とした。焼土・炭化物範囲は中央付近を中心見られたが、床面は被熱していないことから投棄されたものと考える。

ピット 4基確認されたが、規模・配置からいずれが主柱穴に相当するかは不明である。P2~4は主軸線上に3基並んで配されていた。P1は楕円形を呈し22×16cm、深さ5cm、P2は楕円形を呈し23×14cm、深さ5cm、P3は円形を呈し25×22cm、深さ5cm、P4は楕円形を呈し21×11cm、深さ4cmを測る。

カマド 北壁のほぼ中央に構築されている。数ヶ所本の根による搅乱がみられた。住居北壁から87cm程壁外に掘り込んで煙道部を構築している。全長約1.0mで燃焼部の掘り込みはほとんどなく、ほぼ床面と同じ高さであった。燃焼部から奥壁にかけては外傾して立ち上がる。奥壁にかけての両側は被熱による赤変の痕跡が部分的に観察できた。両袖は砂混じりの灰白色粘土で、右袖は壁と一体化しているように遺存しており、良好に検出できなかった。また、左袖の灰白色粘土を取り除いたところ、袖下にも壁溝が巡っており住居の構築順序が想定できる。焚き口幅は約51cmを測る。カマドの袖脇より鉄製の鎌が出土している。覆土は10



第10図 第3号住跡・出土遺物

層に分層された。

覆土 6層に分層された。東側には第4層の灰白色粘土混じりの褐色土が堆積しており、覆土上位まで埋め戻しを行なった可能性が考えられる。

出土遺物 図化したのは鉄製の鎌1点のみの出土である。柄に装着するための端部の折り返しが残る。この鎌の上部縁辺は直線的であり、刃部は使い込みの影響もあるのか弧状を呈している。このほか、図化していないが土師器小破片と須恵器小破片が出土している。須恵器小破片の中には端部内面に返りを持つ蓋が見られる。そして、写真図版で示した炭化種子（ウメか？）が出土している。

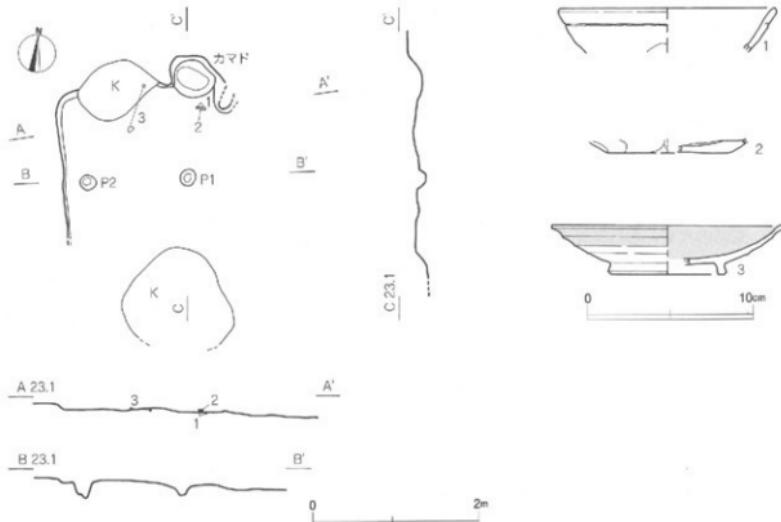
所見 本住居跡の規模は第1・2号住居跡より小形である点が特徴的である。今回の報告では図化していないが、須恵器小破片の中に端部内面に返りを持つ蓋が存在することから、第2号住居跡と同様な時期のものと考えることが可能である。

第3号住居跡

図版番号	器種	法量 (cm · g)			特徴	備考	
		長さ	幅	厚さ			
第10図 1	鉄製品 鎌	(11.9)	3.5	0.1 ~ 0.3	(29.0)	端部を折り返して柄の装着部分を作っている。刃部は長く直線的、柄に近接した側は湾曲している。	カマド隣

第4号住居跡 (第11図 PL4・9・10)

位置 調査区南東寄りH-6・7グリッドに位置し、標高23.0mを測る。住居跡東・南側は削平・搅乱により、壁の立ち上がりは確認できなかった。本住居跡は当初焼土跡と認識していたため、カマド部分から先に調査を行なった。その後、遺物や被熱した砂質粘土などが出土し、周辺の精査を行なったところ部分的に覆土が残っていたことから、住居跡と判明したものである。



第11図 第4号住居跡・出土遺物

平面形・規模 壁の残存部分から方形を呈すると思われる。長軸（2.22）m、短軸（1.82）mを測る。

主軸方向 N - 8° - W、ほぼ南北方向である。

壁面 北壁・西壁の一部が確認された。壁は外傾して立ち上がり、確認面からの最深部は20cmを測る。塗溝は確認できなかった。

床面 部分的に起伏を有している。硬化面、貼床などは確認できなかった。床面の標高は22.9m前後で、同じ標高に位置している第2号住居跡より約50cm高い。

ピット 2基確認されているが、規模・配置からいざれが主柱穴に相当するかは不明である。どちらも円形を呈し、P 1は21×20cm、深さ11cm、P 2は21×19cm、深さ19cmを測る。

カマド 北壁に位置している。北壁から37cm程壁外に掘り込んで構築されている。壁外の部分は全て燃焼部と思われ、床面からの深さは9cmを測る。全長は約52cmを測り、燃焼部は緩やかに外傾して立ち上がる。被は片側のみが確認されている。焚き口幅はおよそ50cmを測る。焚き口の手前側に土師器の壊底部が1点出土している。

出土遺物 出土点数は少ないものの全て床面上からの出土である。1・2は土師器壊、3は灰釉陶器の高台付皿であり、2ヶ所に分かれて出土したものが接合した。

所見 3の灰釉陶器が9世紀後半から末葉と考えられることから、住居跡の時期も同様の時期と思われる。

第4号住居跡

区分番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11回 1	土師器 壊	口径 [13.2] 器高 (2.8)	体部と口縁部の間にわずかな棱を有する。体部内溝し、口縁部は外傾している。	体部板位へラ削り後、ナデ。口縁部・内部は横底ナゲ。口縁部と体部の境の後は輪樋痕をそのまま残している。	素面多量、表石・石英 少量 内外面にぶい 橙色 吉通	10% 床面直上
第11回 2	土師器 壊	底径 [7.3] 器高 (0.9)	底盤は平底で、体部は外傾している。	底面はヘラ削り後、ナデ。底盤直上は横位へラ削り。内面はナデか。	素面多量、表石・石英 少量 内外面にぶい 橙色 普通	30% 床面直上 内面に赤色十付着
第11回 3	灰釉陶器 高台付皿	口径 [14.2] 高台径 [7.2] 器高 3.0	高台はわずかに外側に張り出し、外縁の端部は接続していない。体部は浅く、内溝し、口縁部は緩く屈曲して外反する。	体部は反時計回りの回転ナゲ。高台は付高台。外面上半と内面の見 内外面灰白色 凸部まで施釉されている。	長石・石英少量 良好	25% 床面直上

2. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第12図 PL 5)

位置 調査区北東寄り、F・G-2・3グリッドに位置する。標高は22.5~22.25mの緩傾斜部にあたる。ピット群や溝跡と同様な場所に検出された。

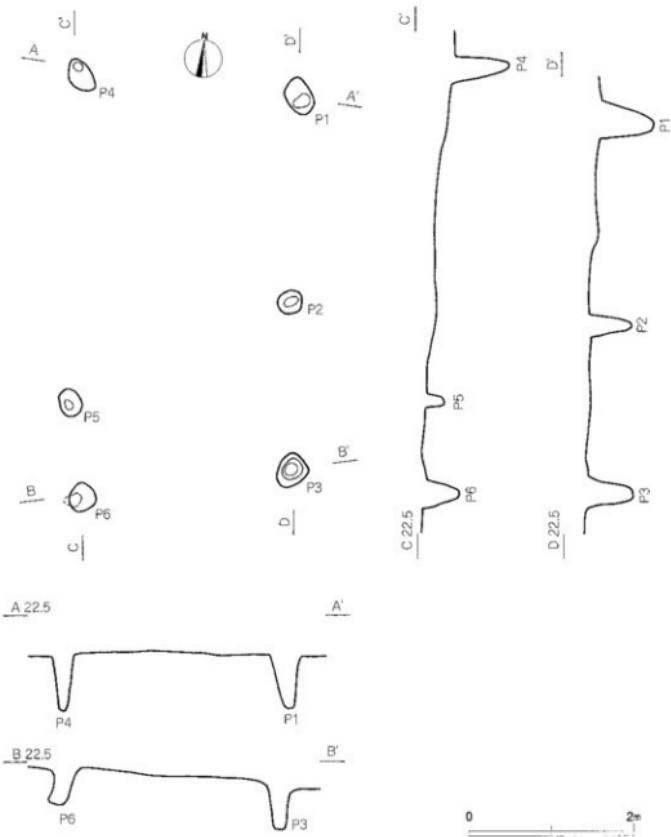
規模 変則的だが、東西梁行1間、南北桁行2間の南北棟である。全体の構成は梁行P 1-P 4間2.8m、P 3-P 6間2.65m、桁行P 1-3間4.5m (P 1-P 2は2.45m、P 2-P 3は2.05m)、P 4-P 6間5.3m (P 4-P 5は4.15m、P 5-P 6は1.15m)を測る。

長軸方向 N - 4° - W、ほぼ南北方向である。

柱穴 各ピットの形状・規模・深さ・底面標高は、P 1が隅丸長方形・43×31・66cm・21.38m、P 2が円形・31×29・52cm・21.67m、P 3が隅丸方形・40×35・55cm・21.69m、P 4が梢円形・45×30・71cm・21.35m、P 5が隅丸方形・32×26・41cm・22.01m、P 6が円形・34×33・46cm・21.99mを測る。壁はほぼ垂直もしろくは弱く外傾して立ち上がるものが多いが、P 6はオーバーハングしている。断面形状は左右対称となるピットが多い。平面形は開口部と相似形を呈するピットが少なかった。

遺物 出土していない。

所見 この掘立柱建物跡が確認された場所から南方を臨むと、急傾斜を登った先に台地最高位の平場に至る



第12図 第1号掘立柱建物跡

ことから、この建物の構築にあたって台地傾斜部を削り出すような地形の人為的な改変が行われている可能性が考えられる。本遺構からの遺物は出土していないが、周辺に検出された溝跡と同様な覆土を持つことから中世の所産と考えられる。

3. 火葬施設跡

第1号火葬施設跡（第13図 PL 6・11）

位置 調査区中央やや東寄り、E-5グリッドに位置している。遺構の北側に搅乱がみられた。標高は約23.3mである。

平面形・規模 全体的には「T」字形を呈する。細かく見れば北側の長方形土坑とこれよりやや小さい隅丸方形土坑が溝により連結されたような形状である。ここでは長方形土坑を主土坑と呼称することとした。主土坑は長軸1.04m、短軸46cm、隅丸方形土坑は長径68cm、短径48cm、これらを連結している溝状の部分は長径・短径ともに28cmを測る。主土坑と隅丸方形土坑はほぼ平行の位置関係となるが、連結する溝状部分が主土坑に対して直交しておらず、全体に捻れたような印象を受ける。

長軸方向 N-31°-W（連結する溝状部分を長軸とした場合）、N-66°-E（主土坑の長軸から）。

壁面・底面 主土坑は開口部と相似形を呈し、中央部は段状に掘り込まれている。この段の上面部分は連結部である溝状の土坑を介して隅丸方形土坑へと繋がり、主土坑下面の下部ピットは単独の存在となっている。主土坑は相似形の部分が深さ16cm、最深部は40cm、隅丸方形土坑と溝状の土坑は深さ12cmを測る。断面形状は主土坑と接する箇所で急激に深くなり、下部ピットへと至る。

覆土 覆土全体に炭化物の混入がみられたが、主土坑側で極めて多い。主土坑内の溝状部分と連結する箇所は壁面全体が被熱により著しく赤化しており、下部ピットには炭化物が詰まった状態であった。この炭化物上面に銅鏡・骨片が出土している。

遺物 主土坑の下部ピット上面から銅鏡5枚が癒着した状態で出土している。非常に脆く分離することが困難で、1枚だけ「天慶元寶」と判読できた。骨片は3g出土している。

所見 本遺構の主土坑と呼んだ部分を中心非常に良く焼け、炭化物や骨片が出土していることから、人体を火葬するための燃焼部と考えられ、隅丸方形土坑はカマドの焚口と同様な機能を有していたと考えられる。これらをつなぐ溝状の部分は通風穴（溝）的な機能を持っていましたと思われる。本遺構は出土した銅鏡（初鑄は1023年）から中世の火葬施設跡と考えられる。

第1号火葬施設跡

図版番号	器種	法量 (cm・g)				特徴	備考
		外径	内径	厚さ	重量		
第13図 1	銅鏡	24	19	0.15	(12.0)	銅鏡 5枚が重なった状態で出土 1枚は「天慶元寶」真書 北宋 初鑄1023年	5枚重ね 厚さは1枚分で計測

4. 焼土跡

焼土の範囲がある形状をなしている箇所を焼土跡として調査した。合計4基確認されている。

第1号焼土跡（第14図 PL 7）

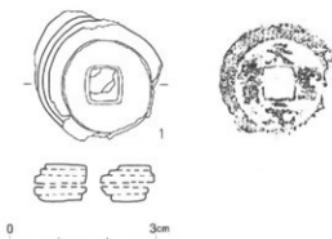
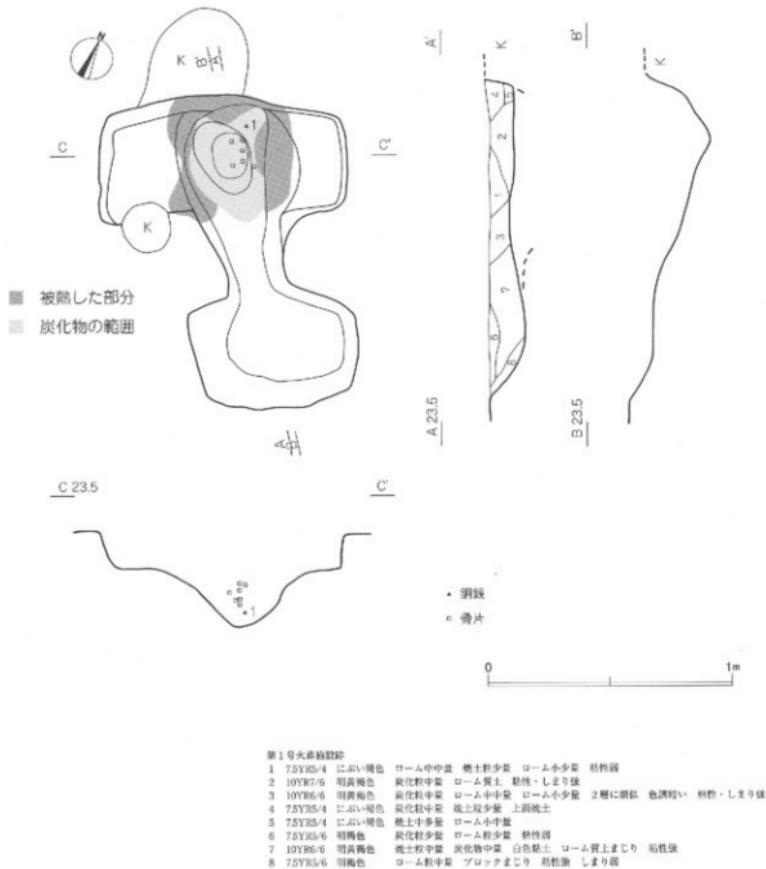
位置 調査区ほぼ中央、E-4・5グリッドに位置している。標高は約23.4mである。東側は完掘していない。

平面形・規模 おそらく略円形を呈すると思われる。長径47cm、短径(22)cmを測る。

壁面・底面 坑底は起伏を有し、壁は緩やかに皿状に立ち上がる。確認面からの最深部は6cmを測る。底面に被熱の痕跡は確認できなかった。

覆土 1層である。全体に焼土粒の混入がみられた。

遺物 出土していない。



第13図 第1号火葬施設跡・出土遺物

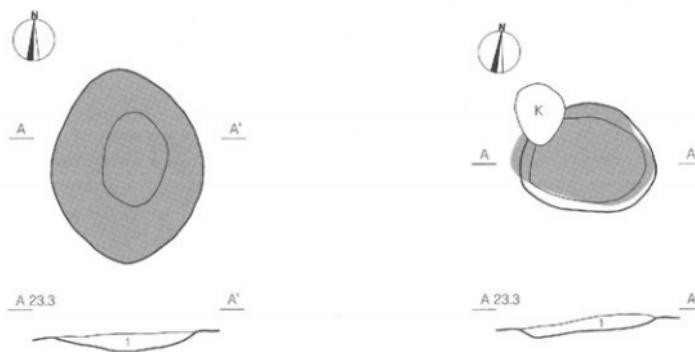


第1号焼土跡
1 SYR6/6 赤褐色 焼土中・小・粒中量 焼土大少量 しまり強

SF-1

第2号焼土跡
1 SYR6/8 非開色 地上中・小・粒中量 焼化物中量 焼土大少量 白色粘土
粘性・しまり強
2 SYR6/8 赤褐色 焼化物中量 焼土小・粒少量 白色粘土 粘性・しまり強
3 SYR6/6 非開色 焼土小・粒少量 白色粘土 粘性・しまり強

SF-2



第3号焼土跡
1 SYR6/6 赤褐色 焼土粒多量 ローム粒中量 焼土小少量 粘性弱

SF-3

第4号焼土跡
1 SYR5/4 淡い赤褐色 焼土粒中量 焼化物中量 粘か令白色粒中量
しまり・粘性強

SF-4



第14図 第1～4号焼土跡

所見 時期については明確にし得ないが、覆土の状況は奈良時代以降のものとは考えにくい。そして、遺構外出土遺物に縄文時代の土器などが出土していることから、同時代のもと判断した。

第2号焼土跡（第14図）

位置 調査区西側、B-5グリッドに位置している。標高は約23.1mである。

平面形・規模 略円形を呈し、長径44cm、短径39cmを測る。開口部と底面は相似形である。

壁面・底面 底面は起伏を有し、壁は緩やかに立ち上がる。確認面からの最深部は13cmを測る。底面に被熱の痕跡は確認できなかった。

覆土 3層に分層された。近似した上層だが、焼土粒は壁際より中央付近が多いようである。

遺物 出土していない。

所見 時期については明確にし得ないが、覆土の状況は奈良時代以降のものとは考えにくい。そして、遺構外出土遺物に縄文時代の土器などが出土していることから、同時代のもと判断した。

第3号焼土跡（第14図 PL7）

位置 調査区南西側C-7グリッドに位置している。標高は23.45mである。

平面形・規模 楕円形を呈し、長径80cm、短径62cmを測る。開口部と底面はほぼ相似形である。

長軸方向 N-7°-W、ほぼ南北方向である。

壁面・底面 底面から壁面にかけて皿状に緩やかに立ち上がっている。確認面からの最深部は17cmを測る。底面に被熱の痕跡は確認できなかった。

覆土 1層である。焼土粒が均一に混入している。焼土跡の覆土の中では、最も焼土粒の混入が多い。

遺物 出土していない。

所見 時期については明確にし得ないが、覆土の状況は奈良時代以降のものとは考えにくい。そして、遺構外出土遺物に縄文時代の土器などが出土していることから、同時代のもと判断した。

第4号焼土跡（第14図 PL7）

位置 調査区南西側C・D-7・8グリッドに位置している。標高は23.45mである。北西側は搅乱により一部壊されていた。

平面形・規模 楕円形を呈し、長径55cm、短径45cmを測る。開口部と底面は相似形である。

長軸方向 N-82°-E、ほぼ東西方向である。

壁面・底面 底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。確認面からの最深部は8cmを測る。底面に被熱の痕跡は確認できなかった。

覆土 1層である。

遺物 出土していない。

所見 時期については明確にし得ないが、覆土の状況は奈良時代以降のものとは考えにくい。そして、遺構外出土遺物に縄文時代の土器などが出土していることから、同時代のもと判断した。

5. 溝跡

第1号溝跡 (第15図 PL5)

位置 調査区北東、E～G-3グリッドに位置している。標高は22.25～22.75m付近で、等高線に対して長軸はおよそ45°の角度を向いている。東側で第1号住居跡と重複しており、土層観察から本遺構が新しいと判断した。北側にはピット群が位置している。西側は確認できなかった。

平面形・規模 直線的である。東側は幅が広く、残存の中位程から一気に細くなっている。西側の細い溝と東側の幅の広い溝は途中で連結されたような形状である。長さ(12.2)m、幅0.3～1.7mを測る。

長軸方向 N-88°-E、ほぼ東西方向を向いている。

壁面・底面 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。確認面からの最深部は32cmで、西側に向かうに従い浅くなってしまっており西端では8cm程の深さであった。

覆土 2層に分層された。

遺物 出土していない。

所見 第2号溝跡と覆土の状況が類似することから、中世の遺構と考えられる。

第2号溝跡 (第15図 PL5・10)

位置 調査区北西側、C・D-2・3グリッドに位置している。標高は22.25～23.0m付近で、等高線に対して長軸が直交している。溝跡の両端は確認できなかった。

平面形・規模 直線的で、幅もほぼ同程度である。長さ(7.4)m、幅0.5～1.3mを測る。

長軸方向 N-28°-E。

壁面・底面 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。確認面からの最深部は28cmを測り、底面は上面とほぼ相似形であった。

覆土 5層に分層された。第2・4・5層はローム質土である。

遺物 覆土中から常滑産陶器壺の底部片が1点出土している。

所見 出土遺物から中世の遺構と考えられる。

第2号溝跡

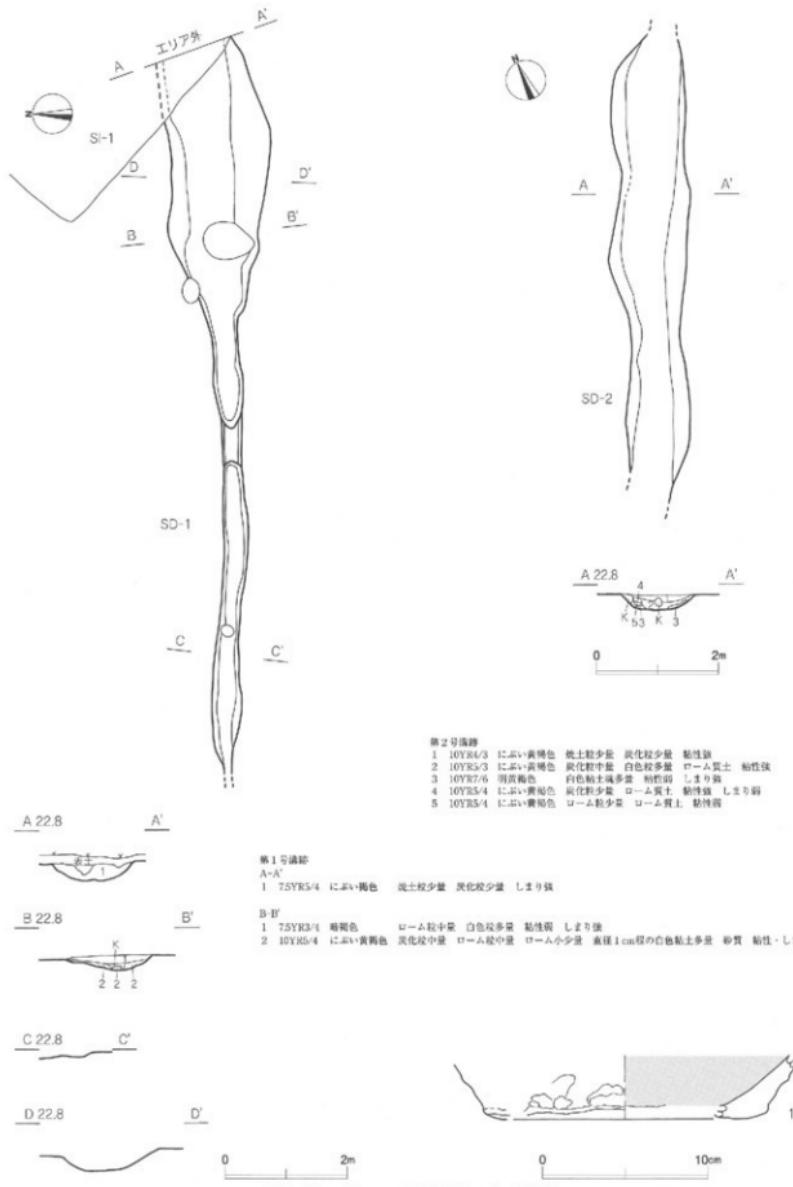
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・施成	備考
第15図 1	陶器 壺類	底径 〔17.4〕 〔34〕 〔浴高〕	底部は平底で、底面着部に後を有し、ここから外彌し体部へ至る。	底面は無い削りとナデで凹凸が残る。底面着部はハラ削りにより削取りされた。外面ナデだが平滑ではない。内面全面に施釉される。	共石・石英中量 灰褐色 黄褐色	外面 内面にぶい 普通 常滑産陶器 25% 覆土

6. ピット群 (第16図 PL5)

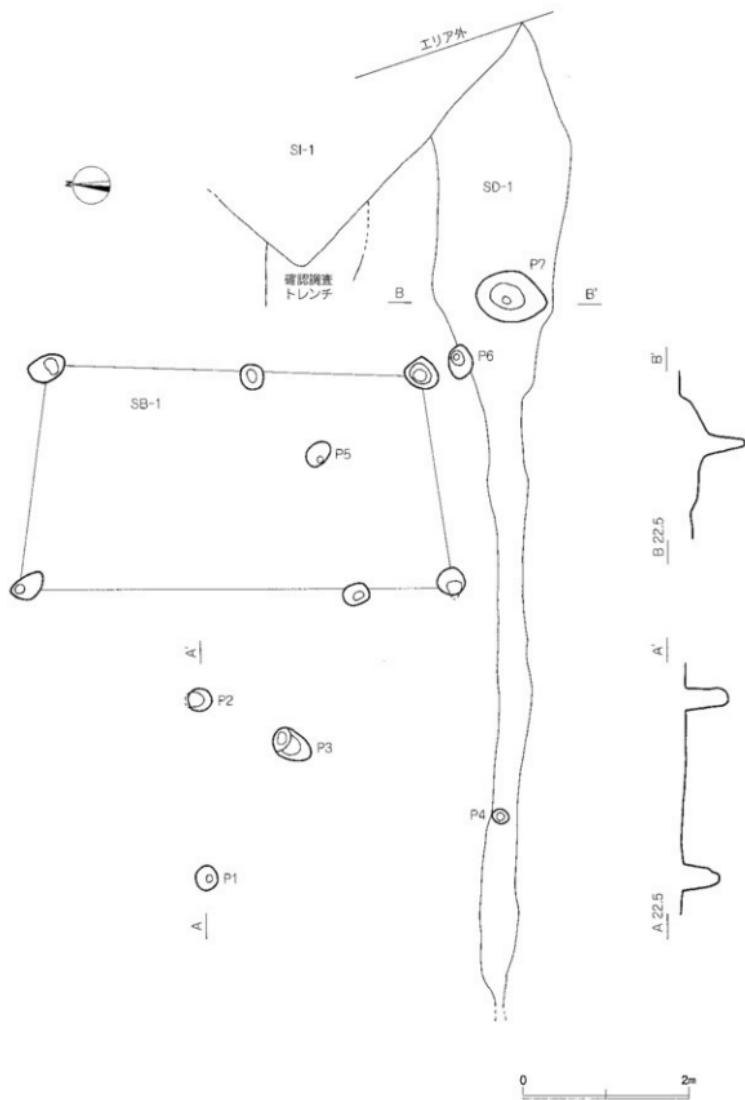
位置 調査区北東側、E～G-2・3グリッドに位置し、第1号掘立柱建物跡・第1号溝跡と重複しているが新旧関係は不明である。ここでは規則的な配置をとらないものをピット群としている。標高は22.25～22.5mの間であった。

ピット数 7基確認された。

平面形・規模 各ピットの形状・規模・深さ・底面標高は、P1が円形・32×27・47cm・21.864m、P2が円形・29×28・54cm・21.757m、P3が椭円形・52×35・27cm・22.165m、P4が円形・24×19・9cm・23.54m、P5が椭円形・35×26・62cm・21.67m、P6が椭円形・42×30・63cm・21.64m、P7が椭円形・87×62・80cm・21.544mを測る。壁はほぼ垂直もしくは外傾して立ち上がるものが多いため、P2はオーバーハングし



第15図 第1・2号溝跡・出土遺物



第16図 ビット群

ている。断面形状は左右対称となるピットが多い。平面形は開口部と相似形を呈するピットが少なかった。

遺物 出土していない。

所見 本遺構の検出状況や覆土の状況が第1号掘立柱建物跡の柱穴と類似することから、同様な時期が考えられる。

7. 遺構外出土遺物（第17図 PL11）

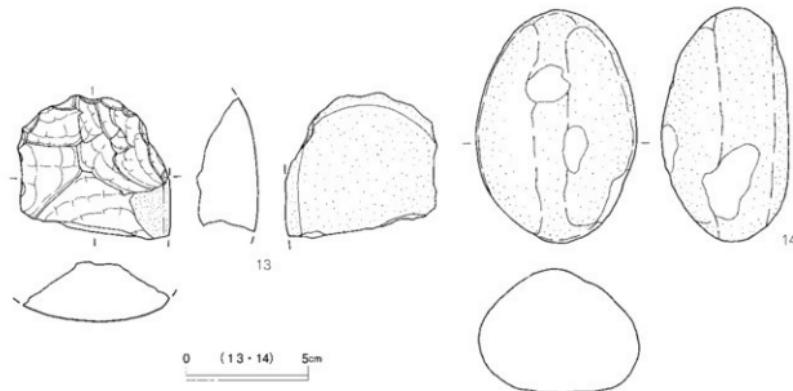
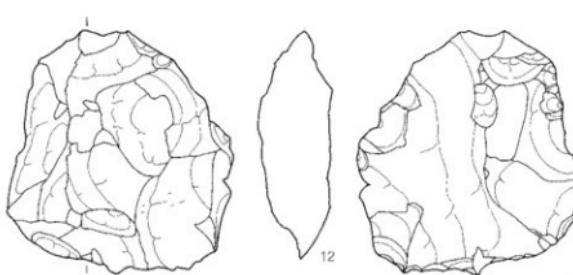
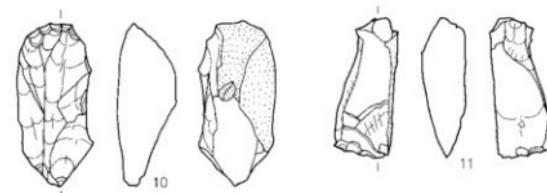
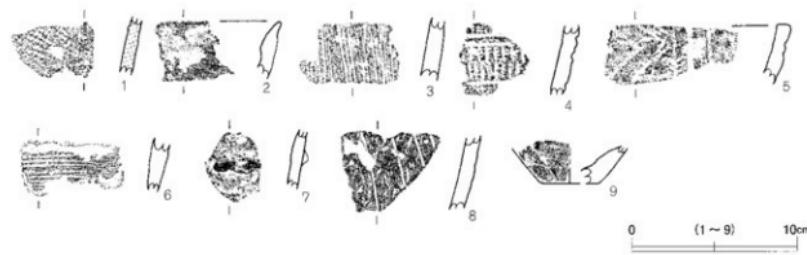
1～9は縄文土器片で、10～14は石器である。1は前期前半の黒浜式土器の破片と思われる。胎土に鐵雜が入る。2～4は前期後半の土器で、浮島式及び興津式土器である。5は前期末葉の粟島台式土器である。

6～9は後期後半の安行式土器であろう。10・11は楔状石器でこのような形の形成が目的ではなく、他器種製作の素材と考えられている。12は剥片、13は打製石斧の製作途上のもの、14は磨石類と考えられる。

（福田礼子）

遺構外出土石器

図版番号	器種	法量 (cm · g)			特徴	石材・出土地点	
		長さ	幅	厚さ			
第17図 10	石器 楔状石器	(3.3)	(1.6)	(1.2)	(6.7)	夷砸打撃によって形成される。片面には裏面を残す	チャート 第2号住居跡
第17図 11	石器 楔状石器	(2.9)	(1.2)	(0.9)	(3.8)	夷砸打撃によって形成される。一面に風化面を残す	チャート
第17図 12	石器 剥片	5.0	4.6	1.5	33.9	微細な調整削離	チャート
第17図 13	石器 打製石斧	(5.9)	(6.1)	(2.5)	(107.5)	両面に擦痕を残す	ホルンフェルス 第2号住居跡
第17図 14	石器 磨石類	6.5	9.6	5.1	(413.0)	被熱により赤化	砂岩 第3号住居跡



第17図 遺構出土遺物

第4章 総括

今回の調査跡の調査で確認された遺構・遺物について、時代順にその特徴などに触れ総括とする。時代的には縄文時代・奈良・平安時代・中世の遺構・遺物が出土しているが、本遺跡において集落としての体裁をとるのは奈良・平安時代であるといえる。中世においては建物跡も確認されているが、火葬施設跡という葬送にかかる施設が発見されている。

○縄文時代の遺構・遺物

この時代の遺構としては焼土跡とした遺構が4基調査され、いずれも小規模なものであり、台地上の中央から西側にかけ見られた。これらの遺構の覆土には焼土粒などが多量に混入しているが、一般的な竪穴住居跡に設けられる炉跡とは異なり、その底面は焼け固まる状況が見られない。この遺構の構築時期については、明確に伴う遺物がなく確定できていないが、これらの遺構の周辺から若干ながら前期の土器が出土していたことから関連性が想定できる。また、出土石器の中には市内の下郷遺跡でまとめて出土している前期的色彩の強い楔状石器（註1）が2点見られ、先の遺構のあり方とも関連するものかも知れない。

そして、本遺跡の北西約150mには後・晩期を中心と形成された上高津貝塚が存在するが、今回の調査地内には同時期の遺構は全く確認できず、遺物も極わずか出土したのみである。このことから、当遺跡は遺構・遺物の検出状況から考えれば、上高津貝塚との関連性が薄い土地であることが理解できる。

○奈良・平安時代

この時代の遺構としては、竪穴住居跡が4軒調査され、本遺跡が文字通り集落跡と言える状況を呈している。これらの竪穴住居跡のうち第1～3号住居跡の3軒は、その出土遺物の特徴から7世紀末葉から8世紀前葉頃のものと考えられ、残りの1軒が9世紀後半から末葉のものと位置付けた。本報告では前者の時期を便宜上奈良時代としてとらえ、後者を平安時代としている。前者の竪穴住居跡のあり方の特徴は、台地上だけではなく台地裾の緩い傾斜地にも構築されていることである。これらの竪穴住居跡は平安時代のものに比べ掘り込みがしっかりとしており、その大きさは1号住居跡が小型のもので、2号住居跡は未調査部分を残すが大型の竪穴住居跡であるといえる。これらの竪穴住居跡の床面は特徴的で、1・2号住居跡が粘土層中に構築され、3号住居跡は砂層中に構築されていた。平安時代の4号住居跡については、遺存状況が良くなく掘り込みが浅いせいもあるが、奈良時代とした3軒の竪穴住居跡と比べるとその造り方や構造に差異を感じる。

これらの遺構の出土遺物としては、土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品・炭化種子などがある。7世紀末葉から8世紀前葉頃の土師器としては、壺・甕・瓶などが出土しており、須恵器では蓋・壺が出土している。当遺跡のこの時期の出土土師器の特徴は、壺の形態が古墳時代的ななごりを感じるもので、第2号住居跡出土10の甕は「常総型甕」（註2）と呼ばれるものである。この常総型甕は古墳時代から平安時代にかけ、茨城県南部を中心にその周辺地域まで分布を見せ、口縁部のつまみ上げや胴下半部の調整などに特徴が見られ、胎土には筑波山塊の深成岩が起源と考えられる石英・長石・雲母粒が多く含まれる。

また、当遺跡での出土した7世紀末葉から8世紀前葉頃の須恵器の特徴としては、その胎土に石英・長石・雲母粒が含まれ、新治窯跡群産須恵器と呼ばれるものがほとんどである。現状では、この頃の窯跡として確認されているものは土浦市内の栗山窯跡やかすみがうら市の一町田窯跡などの数箇所のみで、この窯跡群の

成立期のものといえる。本遺跡の須恵器の出土状況からすれば、この時期の新治窯跡群須恵器がその周辺地域の集落に一定供給されている様子が窺える。その反面、第2号住居跡出土の須恵器坏7については、在地産須恵器とは異なる胎土や作風が見られ、わずかながら非在地須恵器が流入している様子が窺える。

そして、9世紀後半から末葉とした第4号住居跡出土遺物の特徴は、須恵器が含まれず土師器主体で灰釉陶器が含まれている点にある。

当遺跡と同様な奈良時代や平安時代の集落跡が確認された周辺の遺跡としては、上高津貝塚C地点やうぐいす平遺跡などでの調査があげられる。上高津貝塚C地点では、縄文時代の遺構を壊して6軒の竪穴住居跡が確認され、そのうちの3軒は北側にカマドが構築されているようである。これらの住居跡のうち1軒のみ一部調査を行ない、ほかの住居跡は確認のみにとどまる。その結果、住居跡からの出土遺物は8世紀初頭から前葉の土師器坏や須恵器坏などが出土している。また、同所で確認された溝跡からは9世紀後半頃の須恵器坏などが出土している。そして、遺構外出土遺物にも7世紀末葉から8世紀初頭の土師器や須恵器が掲載されていることから、この時期の遺構を中心に集落が展開している可能性が考えられる。うぐいす平遺跡では8世紀前半の比較的規模の大きな竪穴住居跡が6軒検出されている。その後9世紀中葉までは集落の展開が低調で、9世紀後葉以降竪穴住居跡の規模は全体的に小規模になり、住居跡の数は増加するようである。これらの周辺の遺跡での出土遺物の特徴としては、8世紀前半では新治窯跡群須恵器がそれ以前に比べ安定して供給され、その器種の主体は蓋と坏であることが理解できる。そのような中にあって、わずかながら特徴的な器種を中心に湖西産須恵器など（註3）が持ち込まれているようである。9世紀後葉以降の出土遺物の特徴としては、須恵器がほとんど見られず土師器が主体を占めるようになり、その中に灰釉陶器が含まれるようになる。

このように、諏訪窟遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡を取り上げて見てみたが、ある意味8世紀前半の集落遺跡が比較的まとまって筑波船敷台地縁辺の高津地区に展開している様子が窺え、その後の集落の展開についても同様な傾向が見られるようと思う。そして、先の同地区から桜川低地を挟んだ対岸の新治台地縁辺の常名地区にも奈良時代のまとまった集落跡である弁才天遺跡が存在しており、古代の交通にかかわり興味深い状況を見せている。

○中世

中世の遺構と考えられるものは、火葬施設跡1基、溝跡2条、掘立柱建物跡1棟などがあるが、遺構に伴う遺物が非常に少なくあまり明確ではない。遺物が伴った遺構としては、火葬施設跡や溝跡1条のみであり、当遺跡における遺構・遺物にみる当時の人々の生活感は乏しい。

まず1号火葬施設跡したものであるが、いわゆる「T」字状火葬施設と呼ばれるもので、台地上の最高位付近で確認された。この遺構は北側の燃焼部と南側の焚口部、そしてそれをつなぐ溝状の掘り込みからなる。燃焼部やその中央に掘り込まれた溝状の掘り込み付近は被熱赤化しており、この部分を中心に炭化物が多く見られ、小さな火葬骨片や銅鏡5枚が出土している。当遺跡出土例と同様な形態の火葬施設跡は市内の東出遺跡や神出遺跡でも検出され、異なる形態のものも見られた。県内の中世の遺跡からも多く確認されており、その地域によっても形態に若干の差異が見られるようであり、少量の火葬骨片以外の遺物が伴って発見される例は稀といえる。このような遺構を火葬墓とする意見（註4）もあるが、遺構の特徴や火葬骨の出土状況からすれば、火葬施設としたほうが妥当と考えられる。また、時期を決定できるような遺物が稀なことから、その帰属時期も中世という表現にとどまるものが多い。

このような遺構で火葬骨片以外の出土遺物が発見された例として、管見の中で県内の事例は火葬骨片と土製数珠玉とされるものが3点出土したつくばみらい市の前田村遺跡J区で検出された第3278号土坑と呼ばれる火葬施設跡のみであった。この遺構の火葬骨の分析では、成人の頭蓋骨・上下頸骨・四肢骨・椎骨・指骨が出土している。県外の事例では、千葉県四街道市和良比遺跡の火葬施設跡ではほぼ完形のかわらけが2点している。同様な遺構から銅鏡が出土した例として、千葉県成田市の野毛平高台遺跡の火葬施設跡3基（註5）がある。132号跡からは2枚癒着した銅鏡が燃焼部から出土し、1枚は「永楽通宝」であることが分かる。135号跡からは2枚の銅鏡が出土し、「大觀通宝」と「政和通宝」が各1枚出土している。137号跡からは5枚の銅鏡が出土し、「永楽通宝」が3枚に「祥符通宝」と「元祐通宝」が各1枚出土している。これら以外にも詳細に調べればほかに事例があるかも知れないが、全体としては非常に少ないものと考えられる。

このような火葬施設跡の構築時期については、伴出遺物のある事例や同遺構検出遺跡のほかの遺構の検出状況から考えれば、15世紀から16世紀の中に収まるものと思われる。また、この遺構の性格を火葬施設とした場合、まれに見られる銅鏡などの出土遺物がどのような意味合いで捉えるかが今後の課題となる。加えて、火葬施設で火葬した骨の大部分が最終的にはどこに葬られたのかについても検討されるべき問題である。

当遺跡における火葬施設跡以外の遺構としては、台地裾部に溝跡や掘立柱建物跡が確認されている。特に掘立柱建物跡や第1号溝跡が検出された緩傾斜の平場については、これらの遺構を構築する際に台地裾を造成しているのではと想起させる地形といえる。これらの遺構群と台地上の火葬施設跡の関係については不明である。

註釈

- 1) 土浦市教育委員会2001の中で、石器の報告を担当した塙田忠一氏により、この石器は両極打撃が確認され、このような形の成形を目的として製作されたものではなく、更に加工を施しほかの器種製作の素材であろうとの考え方によって、「楔形」ではなく「模状」とされるものである。
- 2) 横村1998で常総型壺や常総型壺の概要について触れ、その編年を試みている。
- 3) うぐいす平遺跡出土須恵器には、瀬西産須恵器以外に新治窯跡群須恵器の胎土には含まれない「骨針」や「白色針状物質」が含まれる須恵器が出土しており興味深い。
- 4) 単純に火葬骨片が出土するからという考え方もあるが、財団法人印旛都市文化財センター1992の中で「燃焼坑転用墓」という用語を用いている。そこでは、燃焼部の形態が直葬土坑墓に形態や規模が類似することや、燃焼部が深いもので1mを超えて、火葬後に墓坑とすることを意識して深く掘られているのではという点などが墓とする重要なポイントとなっている。
- 5) 財団法人千葉県文化財センター 1980。

参考文献

- 財団法人千葉県文化財センター『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1980
千代田町教育委員会『-丁川窯跡調査報告書(附・高倉阿弥陀堂遺跡)』1990
財団法人印旛都市文化財センター『駒井野荒追還跡-マロウドインター・ナショナルホテル成田建設予定地内埋蔵文化財調査報告書-』1992
財団法人千葉県文化財センター『房総考古学ライブラリー7 歴史時代(1)』1992
財団法人茨城県教育財團『(仮称)上高津団地建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 寄居遺跡 うぐいす平遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告書第84集 1994
財団法人千葉県文化財センター『房総考古学ライブラリー8 歴史時代(2)』1994
吉澤 淳『律令制成立期の須恵器の系譜』『東国の須恵器-関東地方における歴史時代須恵器の系譜-』古代生産史研究会 1997

上浦市教育委員会『根鹿北遺跡 果山窓跡 -土浦市今泉公園拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書-』1997

墨村宣行「常能姫彌福年考-茨城南部を中心として-」列島の考古学 渡辺誠先生還暦記念論集
刊行会1998

財団法人茨城県教育財團『伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区再整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 前田村遺跡』・K区』茨城
県教育財團文化財調査報告書第147集 1999

土浦市教育委員会『東出・神出・中居遺跡-宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』1999

土浦市教育委員会『下郷遺跡 下郷古墳群 -佐々木建設株式会社土砂採取工事に伴う埋蔵文化財調査報告書-』2001

土浦市教育委員会『国指定史跡 上高津貝塚C地点-史跡整備に伴う発掘調査報告書-』2006

土浦市教育委員会『弁才天遺跡・北西原遺跡(第5次調査) -土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第10集-』2006

(閑口 満)

写 真 図 版



調査前風景(北東より)



基本層序(北壁)



第1号住居跡

PL 2



第2号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡カマド



第2号住居跡カマド
土層断面

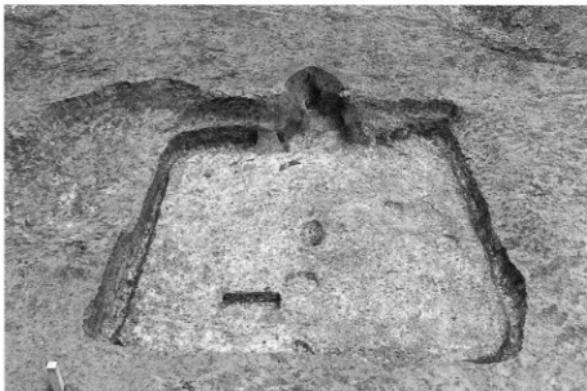


第2号住居跡カマド
土層断面



第2号住居跡カマド
遺物出土状況

PL 4



第3号住居跡



第3号住居跡
遺物出土状況



第4号住居跡





第1号火葬施設跡



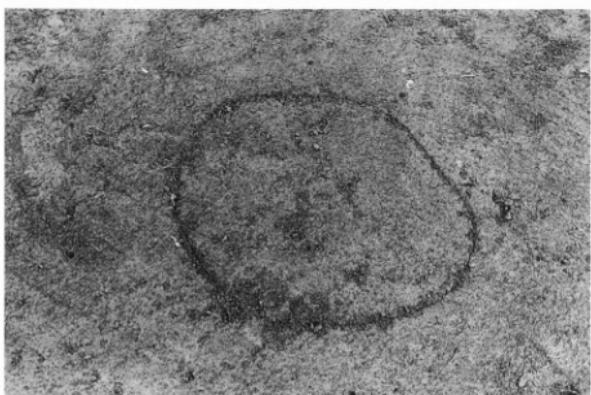
第1号火葬施設跡
炭化物等確認状況



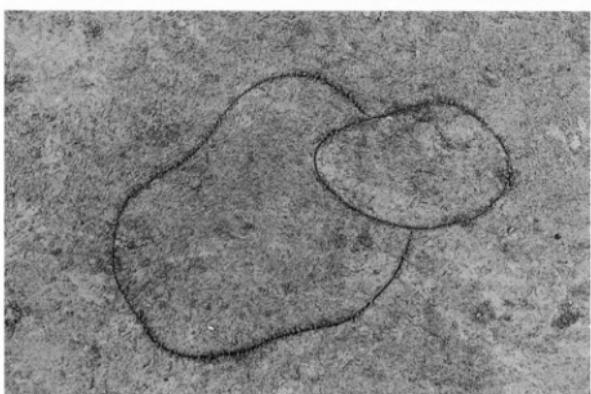
第1号火葬施設跡
遺物出土状況



第1号烧土迹



第3号烧土迹



第4号烧土迹



調査区近景
(南から、手前第2号住居跡)

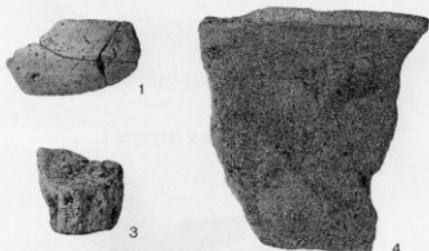


調査区遠景 (北東から)



作業風景

第1号住居跡



第2号住居跡



第4号住居跡



諏訪窪遺跡出土遺物（1）



第1号住居跡2



第2号住居跡1



第2号住居跡7



第2号住居跡8



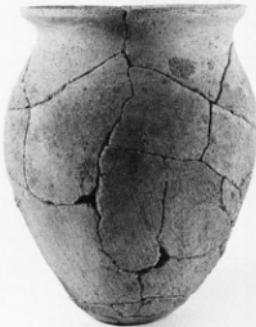
第2号住居跡9



第4号住居跡3



第2号溝跡1



第2号住居跡10



第2号住居跡11

諏訪窪遺跡出土遺物（2）



第2号住居跡13



第3号住居跡 1



SI-2

SI-3

第1号火葬施設跡 1 住居跡出土炭化種子



遺構外出石器



第1号火葬施設跡出土火葬骨



遺構外出土繩文土器

諏訪窪遺跡出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	すわくほいせき							
書名	諫訪窟遺跡							
副書名	保育園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
編著者名	関口 満 福田礼子							
編集機関	諫訪窟遺跡調査会							
所在地	〒300-0811 TEL029 (826) 7111 茨城県土浦市上高津1843番地 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内							
発行機関	土浦市教育委員会							
発行年月日	西暦2007年(平成19年)4月28日							
ふりがな所収遺跡	ふりがな所収遺跡	コード	経緯度	調査期間	調査面積	調査原因		
諫訪窟遺跡	つららしきみやびのくつ 土浦市上高津 1798-2外	市町村 08203	遺構番号 177	北緯 36度 4分 30秒	東経 140度 10分 4秒	半成18年 6月13日～ 7月4日	約1,200m ²	保育園建設事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
諫訪窟遺跡	集落跡	縄文時代	焼土跡4基	縄文土器、石器	出土遺物などから7世紀末葉から8世紀前葉の時期の堅穴住居跡が3軒確認された。			
		奈良時代	堅穴住居跡3軒	土師器、須恵器、鉄製品、炭化種子	また、中世の火葬施設跡と考えられる遺構が1基確認され、その中から銅鏡5枚と微量の火葬骨片が出土した。			
		平安時代	堅穴住居跡1軒	土師器、灰釉陶器				
		中世	掘立柱建物跡1棟 火葬施設跡1基 溝跡2条 など	陶器、銅鏡、火葬骨				
要約	<p>今回の諫訪窟遺跡の調査では、縄文時代から中世にわたる遺構や遺物が検出された。その中でも中心となる時代は、奈良時代から平安時代と中世である。奈良時代から平安時代の遺構は堅穴住居跡4軒で、これらは台地上の平場はもとより緩傾斜地にも構築されていた。奈良時代とした堅穴住居跡は、その出土遺物から7世紀末葉から8世紀前葉頃のものと考えられる。市内におけるこの時期の堅穴住居跡の調査例は少ない。また、平安時代の堅穴住居跡は9世紀後半から末葉頃のものと位置付けられる。</p> <p>中世の遺構は、台地裾にあたる緩傾斜地に掘立柱建物跡1軒、溝跡2条などが検出された。これらの遺構群が存在する台地裾部は、その状況から人為的に変形行為が行われた可能性が考えられる。そして、台地上からは「T」字状の形態的特徴を持つ火葬施設跡が1基のみ確認された。この遺構から微量の火葬骨や「天聖元寶」などの銅鏡5枚が発見して出土している。通常このような火葬施設跡から、火葬骨片以外の遺物が出土するのは稀であり、貴重な出土例といえる。</p>							

諏訪塙遺跡

— 保育園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行日 2007年4月28日
編集 諏訪塙遺跡調査会
発行 土浦市教育委員会
問合せ先 上高津貝塚ふるきと歴史の広場
〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843
TEL 029 [826] 7111
印 刷 (株)あけぼの印刷社